

安楽城あらかきの伝承

— 佐藤陸三さんの語り —

編 武 田 正

安楽城あらかきの伝承

— 佐藤陸三さんの語り —

編 武 田 正

安楽城の伝承 — 佐藤陸三さんの語り —

第一部 昔 話

狐むがし

五

ばばさの炉辺むがし (二)

三六

ばばさの炉辺むがし (二) 年中行事のむがし

七九

第二部 早 物 話

早物語

一一九

早口ことば

一三五

第三部

わらべうた

子どもの呪文唄

一四〇

道くさあそび・悪口唄

一五六

子供の俚諺・戯れ唄

一八四

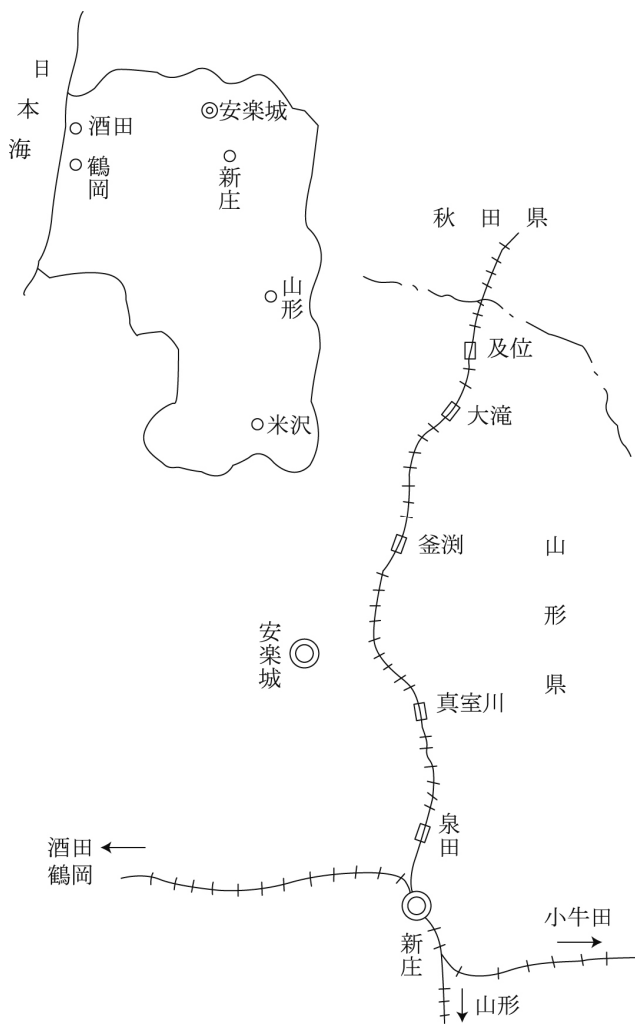
佐藤陸三さんの伝承資料

― あとがきに代えて ―

武田

正

二〇二



第一部 昔話

狐むがし

婆々さの炉辺むがし

狐むがし

1 狐むがしのもと

爺さまが囲炉裏ゆりの横座に座り、可愛めんこい孫つこを胡座にのせて、昔話をきかせる。語りがはずんで、狐むがしが出るようだ、ほ・ど・の火を遠巻きに夜鍋に精出しながら、一緒に耳を傾けていた若達（わかたち）も、傍からそれをさらって花を咲

かせる。そして一段と話をふくらませては、大人の民話に組替えてしまうこともあったろう。そんな香りのする狐むがしが、民謡の里、安樂城でもいくつか伝えられていた。ここにその素材を掃き寄せてみる。

「馬の止動、狐の困快」と、よく諭^{たと}える。馬を扱^あうときに「歩^あべ」という掛声はシーで、つまり「止」。逆に「止まれ」と静止を命ずる時は、ドーといい、文字で表わせば「動」で、どちらもアベコベである。一方狐の鳴き声というか、叫びが、コンコンときこえてくるようだと、天候は快晴に向い、カイカイと、まるで物を引き裂くような音をたててきこえるときは、大荒れの兆。大方は吹雪となる。

「困々」のときと、「快々」とが実際とは逆の現象を呈するという。ともあれ、往時は狐の叫び声が天気予報にもされたぐらいに、狐は人間の近くに生棲していたということになる。

村境を人形立場と呼んでいる。疫病追^{やんめえば}いの時、ここまで追つて来て、藁人形を捨てた名残で、そう言う。大体は「馬捨場」ともいって、付近に家畜の埋葬地もあった。昼でもうすら淋しい環境にあって、その窪^ひ地を流れる沢は、表嶺にあ

る狐穴から大川や人里に出る狐道でもあった。ここでよく狐火が見えたときわがれたものである。狐火は狐が口にくわえて運ぶ獣骨が「鬼火」になるのだとか、狐の唾が光つてみえる、あるいは鳥類の羽毛が青い火に見えるときか、諸説紛々といふところである。

その狐火が点滅しながら行列をつくつて移動するのを見る。これを「狐の婚礼」と呼んだ。囲炉裏にかけた鍋釜の底から自在鉤かぎのはなを伝つて釣鉤そらかぎの煤まで、火が点々と燃え移るさまも、狐の婚礼という。また田んぼ一枚向う側が、さんと陽がさしているというのに、いくら隔たない手前側にかだわしがかかる。馬の背中半分で晴雨が分れるなどという時は、これまた狐の婚礼で、童たちは、こう囃した。

へ 雨の中から

金太さんと銀太さんが

見えるよー

こんな時に井戸のふたをとつて底をのぞこめば、よく「むがさり」の様子が写つて見えると語られた。

よく小豆とぎとか、米とぎとか呼ばれた名代の人騙し狐がいた。これはザルで小豆や米をとぐ音を聴かせて街をかけるという狡猾な狐である。大沢・差首鍋地区に棲む代表的な悪狐をうたいあげた童たちの「戯れ唄」にも、その名が残る。

へ 猪の沢の米とぎ 猿渕の箆狐ざるこ

朴野のよしのに 騙さっちゃ 騙さっちゃ (大沢弁)

へ 北沢の仁兵衛 丸山の万九郎

小橋の小豆とぎに 騙さいだ 騙さいだ (差首鍋弁)

人通りのない所を、夜道などかけた時、米や小豆をとぐような音を耳にしたら、要注意である。狐が好物の生臭物なまぐさを身につけた人を狙う時は、まず舌なめずりするように爪をとぐのが本性である。後になり先になりして追いかけてチャンスを狙う。そうしては傍の立木に寄りすがって脚の爪をとぐ。一方、尻尾でまわりを叩くはた。そのはずみに「ザクトン、ザクトン」となって、まるでザルの中で穀をといでいるのとそっくりに聞こえる。人の気を散らす一つの術なのかもしれない。

田楽飯と納豆は山仕事の弁当ひるに持って行くものではない。山神さまがお嫌いで

あるから、災難にあうといけない。それに狐が田楽飯が好物で、その臭いをかぎつけると、たまらなくなり、白昼でも人にいたずらするという。

行きなれた山道でも、どうかすると歩き続けた時間のわりには、いっこうに目的の地に進んでいない。迷つて、前の場所にもどったりするようなことがあつたら、まず狐にいたずらされてると思つてよい。そう感づいたら、じつと我慢して立止り、タバコに火をつけるなり、まわりの枯草、枯木などを集めて、火を焚く^たなりして時をかせぐと、だんだんに目の前が晴れてくるものである。

狐とばかりは限らない。魔物につかれて騙されたと思つたら、あせつて騒ぎまわらず、心静めて、股のぞきをして、相手をのぞきこむと、正体が読めるという。

狐が人間に化けて出たのだと思つたら、機を見て相手の手首を固く握んでみるとよい。変身したものなら、手首のこぶしのひっかかりがなく、握った手がすっぽり抜けてくる。そこで正体が見破れる。

狐が美人に化けて人を騙すときは、二匹が肩車になる。まるで落語の「二人羽織」であるが、酒酔人がだまされる多くは、この美人狐にである。横の口と下の

口のところが、本物の口にあたるところである。そこから推して急所をねらって打ちのめせばよい。

狐は利口なようでも、畜生のあさましきで、どこか足りないところがある。ある時、生馬に化けて人を騙そうとした。姿形はそっくり変身できても、本性は肉食だから、青草は口にしない。そこを知恵者に見破られて尻尾を出したという。

狐が人間を騙してつれ込む建物には天井がない。どんな豪華な接待をされようとも、天井を見上げれば、青天井であるところから直ちにわかる。また、屋敷に花を植えてない家に宿とるな——畜生や化物に草花の鑑賞眼などあるはずがない。花のないところなら、騙されてるか、化物の棲家に迷いこんだにちがいないというのである。

本当に賢い人と、また反対に阿呆な人には、狐の神通力えすなはきかない。とにかく酒酔人とか、小利口りこうな者になると、すぐ欲に走り、衝動的になつて騙しにひつかかるという論ろんである——。ともあれ、数々の素材から考えて、「狐むかし」は大人の好きな民話でもあったことがしのばれる。

2 屏風売に化けた狐

昔あつたけど。あつどき、少しばり足んなえていう、頭の弱え阿呆^{あに}いだけど。
でもな、如何^{なんた}な人でも何が一つぐらえ得手^えじゆものあるもんだ。この阿呆^{あに}、まだ
自然薯^{じねんじょ}堀りにかげでは、かなう者いない名人でな。とろろの好きな大家の隠居^けさ
んさ、よぐ薯掘^けつてきて呉^けつて喜ばつていっけど。隠居^けさんも阿呆^{あに}どこば、とつ
ても氣に入^けつて、自然薯^{じねんじょ}持^けつてくつど、機嫌^{きげん}えくて、一緒に飯食^{まい}て行^けけてだど。
薯掘^けりも、ほ^だども（そのよう^だども）摺^するなもお前^{まへ}でなえど駄目^{だめ}だどて、おだ
でんなだけど。

薯掘^けるにやな、氣短^{きだん}かにあせつちゆど、途中で折^やつてしまふ。摺^するたて播粉^{すりこぎ}木の
力^{ちから}抜^ひいで播鉢^{はふち}ン中^{ちゆう}さ空氣^{くうき}ば摺^すり込むように、長いごと力を平^{へい}らにカランコロンと
摺^すり続け^{つづ}つど、美味^{みち}ぐでくるてだど。阿呆^{あに}ごととしては、隠居^けさんの依怙^{えこ}背負^{せお}つてつ
と何がど得^えだもんださげ、何でも言^いわた通^{とほ}りすんべちや。ほう言うどごは、まん
ざらの馬鹿^{ばか}でもんなえもんだ。返事^{へんじ}のいらなえ、ちよつとした使^{つか}い走^{はし}りなら、さ

して世話なぐ達へるさげ、しよっちゆう小間使いにさつてだなだど。

あつづき、町さ使わつて行くことなだど。用じゅあ、寒雑魚えつぺえ捕つださ
げて、それば親戚の家さ届げんなだけど。

「阿呆、ええが、どげたごとあても、この風呂敷包みば、向うの家さ着ぐまでは、
体から離すでなえぞ。途中で落したり、忘つたりしなえよう、氣つけでな」

どて、くどくどと言いきかさつて、背中さのせで固く結んで呉んなだけど。阿
呆ごととしては、ご褒美さもありづけちよんで、大意氣なて出がげで行たべ。途
中でおべつた（知つた）人に声かげらつても、他所氣振らないで、しゃんしゃん
ど歩いで行くけど。

先方さ着ぐど、まず遠い所、ご苦勞だつたどて、上げ申さつては。すぐ座敷で
休ませてもらい、いろいろ愛想さつたべ。

「こげた生ぎのええ魚、川所でなええ見つごどもなえ」

どて、家内中寄てきて喜ぶなで、阿呆まだ自分獲たみでえに鼻高くなたべちや。
ええ氣持なて辞儀なしご馳走もなたべ。ほしていいよ立て来る段になたれば、

まだ大事だていう荷物あずけらったけど。町の魚屋いさばやや生ぎのええ海魚入たけさげ、隠居さんさ進ぜたいでたど。今度も途中でどげだことあつても、包みわば自分わ体かから放すなよ、て、何度もいいきかさったけど。阿呆とまだ帰りも座頭背負けえいして、解とげなえよう、きづく結んでもらてきたべちや。

途中で陽落ちだども、天気ええなでな、雪明りたよりに、不自由なく歩いできたど。やがでにやお月さまも出んべ。猿渕沢まできたら、村もそんまそこだし、一汗ひとひかして行んかと思もて、雪の上さ、ねこつと腰下ろしたど。ここは道傍が土手になて、荷背たままでもちようどしやがみ易えい所だ。後ろの木立うっしよまた北風ば避ひげるし、夏なら前がわの川の吹き上げ涼しくて、もってこいの休ひン場なつてつけど。

一休ひとみしてつとき、後ろうっしよから、かついだ（追いつく）人いだど。めんめいごごげだ年の頃は二十前がな。見だごどのなえ娘子あねごで、疲れ出たが、もともと足悪いなだか、少し跛こひいでるみでえ、来るなり、阿呆とのそばさ座りこんで話かけつけど。

「屏風の注文受けだな、届けきたどこだ。なれなえ雪路で、雪原ほてこさ踏み外して足

くじいてしまった。難儀してつゞござさげ、同じ方さ行くなだれば、なんぼでもめんどうみて呉んなえんだか」

てだど。一寸でもええさげ荷物取つかえっこして呉ろ。妾わたしなは屏風ださげ、ガサ大きども、その割にや重えもんでなえ。駄賃も出すさげ、どて、すり寄てきて、やつきどなて口説くどくなだけど。でも阿呆あほうごととしては、なんぼ振ぶりのええ娘あねこ子にたぐづがつたて、金輪際、背中の包みは放す気はなえ。一途なもんで、やんだどて、さつさと立て来てしまたどござど。全く色気も慾気もなえ話で、これにや屏風売りもししやまして（持て余し）諦めるほがながつたべ。

間もなぐ村さ来て、若達だ遊でだなどぶつかたけど。これがら宿さでも寄るどござったんだな。月夜さ浮がれで、雪の上で角力すもうとったり、雪玉ぶん投げたりして戯ほじてたけど。阿呆あほうどさもすがて来つちよん、そればかわして、

「お前達まえだ、ほんげ相手欲しごんだら、上の野のあだりまで行てみんだ。めんごけだ。屏風売り娘子、まだ足悪くして難儀して来つけ。手貸して呉れつど、駄賃もはずむつけぞ。おれ、まだ大家の隠居さんの用持たがてんなで、かまてらんなえがら、

すてできたども、行き会い次第しんだえ行ってみたら、そんまそごらで会うべぞ」
て、教おへだけど。ほしたら、若達も阿呆さからがつてるより色気のある方ええど
見で、そっちさ走たど。

阿呆の話だど、とつくに行きあつてもいい時分だけんど、人つこ一人行き会わ
なえ。これや一杯喰さつたがな。馬鹿に騙されるなんて、よぐよぐの大馬鹿じゅ
うごとが。んでも馬鹿は嘘うそこげなえていうがら、もう少し先まで行ってみんべて言
う者も居で、中には雪女なんなえがったがやどて、話ば一そう面白おもくすんなも出る。
わいわい勝手なえ主人と言いあつてるうぢ、とうど猿溺沢まで来てしまたべちや。で
も今どえ主人ご、若い娘子どころが、人影らしいものも見当らなえ。んだて、せつかく
来たんだ。ここで会つたていうなださげて、ほの形跡残つてなえが、よつくと見
んべどなたど。

たしかに、土手さ寄よかがたよな尻跡が、雪さ二つ並んでついである。片方は赤い
血で汚つてるみでえ、月明かりでよつく見つど、たしかに血痕ちのあとだ。

「一体、大きい尻跡は阿呆なにして、もう片方の血の方は誰だんだが。足ば傷めつ

たつけさげ、これが屏風売りながな」

「あらやど、こっちさも血痕あんど。んだればこれ辿つてみだらば」

じゆなで、のぞみかけで、もう少し追かけてみることにしたど。何時の間にが、その血痕が路から外つて山の方さついであちよん。「こりや可笑いぞ」ていうなで、そっちさ辿つて行てみたべちや。とごろどころすつた様子だども、はつきりと四足つた跡と判じらつたなで、きつとのことで獣だがもしんなえどなて、皆も一そうど元氣出て、後追たふうだちやや。

とうとう、ながねまで来て、白い雪の上さ何が動く影みつけだど。「ほれや、居だ」じゆもんで、雪原も構わず、一散に追かけだべ。逃げおぐつて雪ささつたなば、生き捕たどこだど。正体見だら、手負いの狐で、鉄砲さあだて傷ついたが、ガバヂさかがたな抜けて来たがだんだな。畜生まだ怪我して、自由きかなえなさ、腹は空したあげぐに、阿呆の背負た魚ばねらたもんだべ。でもな、なんぼ狡猾つかしても馬鹿みでえな欲のなえ者はのつて来なえどめえで、騙しきかなえで、けえつて自分みつけらつて、つかまてしまったどこだんだ。若達も阿呆どごば足ん

なえの、馬鹿だのど卑めんども、阿呆のおかげで思いかげなえ祭りも出来だじゅうもんだべや。

どんべからんこ なえけど。

（昔は旧正月が近づくとき、よく屏風売りの姿を見かけたが、昭和になると卓袱台（ちゃぶだい）をかついでやってきた。）

3 馬喰につかまた狐

昔あつどな。「ながねのゴザコ祭」ていえば、とつてもにぎわった祭りでな。西川のながねのてっぺんさ建つてゐる太平山は、裾さ散らばた西川、太平、平枝の三つの集落の人たちで祭てる、別に祠は建つてなえども、石碑の建つてゐる平さ、ゴザ敷いで夜（よ）つびて呑み祭すつごだ。集落の人達でば、餅搗げは一臼、おふかしふかせば、二しきまんま、山さ背負い上げてお祝いすんなで、他所からお祭りさ

招ばったお客にも露天で振舞うとつから、ほういうゴザコ祭りて言わったなべ。
んださげ祭りというど、よくあたりほとりの乞食たち、かぎつけて集るみでえに、
狐達も祭後さ、何がご馳走残てないが、落ちこぼれでもど思て、寄てきたもんだ
べ。

何しろ、このあたりには人を騙すくらえの狡猾な狐がたんと棲でだもんで、ま
ずあげてみつど、丸山の万九郎に丸子、館の白狐、北坂の仁兵衛、小橋の小豆と
ぎ、ながねの信五郎、萩野台のハル子ていえば名代の化け師で、言てみれば差首
鍋狐の七人衆ていうどごがな。中でも北坂の仁兵衛狐は、もともと智恵のある狐
で、よく若い狐たちばそそのがして、いたずらしては人困らへだもんだど。今日
もここさ来る途中で、滝の上の五介馬喰が馬ひいで上んなど会たべ。なえしたが、
気に食わなえごどあつたんだな。うらみもつては仕返しやんべじゅ企みだべちや
な。

馬喰あ馬ひいで上たどご見つど、ほの馬ばどこかの厩さ納めで来るに相違ない、
ほうせば自分家の厩は空ぐなで、良え馬ひいで行たら、きつと馬喰だがんべ。何

処でが出所のわからなえ馬喰さ化くげで行てみだら、これあ面白おもへごどなんべぞ。今日は五介も酒入いつてつさげ、うまぐのつて来んにちげえない。落ちこぼれべえべえつら（奪うばい合い）するより、蒼前祭のご馳走ちしう出させだ方、なんぼ増ましたが。どて、みんなどごけしかけつけど。ほしていいいよどなれば、言い出した仁兵衛まだ何だかんわだ言て、自分わ加からなえで、まず信五郎どこ青馬の大牝馬がんにゅに仕立で、年上の万九郎は馬喰で、小豆とぎまだ引き子こなて行くごどなたけど。さあお天道さまも西山さどつぷり沈しんで、これなら化の皮も易やすやすはげなえべじゅどこで、この偽馬喰だち、滝の上の本当の馬喰家さのりごんだどごだど。

五介も今しがた帰かへつて来て、ちようど腹すかして囲炉裏しなもち端で、糍餅しなもち焼やきながら腹あぶりしつたどごだつたふうだ。そこさ、

「秋田の矢嶋がら、とびきり上等ば引いできたどごだ。ちよつと見てくんなえが」て、誘さそたどごだべ。んでも、五介、まだどうしたが、いつこう気進きしんまなえふうで、それていいうなは、馬の善悪よんまは夜間見よんまだて、わかるもんでなえ。馬は臆病おくびやうたがりて、どどげた疳かんのつよい暴れ馬でも、夜になればべそつとなて、音なぐなるもんだ。月

明りで馬見で馬喰しろなて、つぶし馬であるめえし、一体、この野郎達やろだ、本当に馬喰だか、あやしい。どっから来たんだが、秋田あたりがら山越して腹へらしたなで、何かありつこうと寄た、んねが。あいさつされりや、晩飯ぐらえ出して呉んねんねべども。それにしてもわざわざ立て行ぐともなえだろ。まず婆さまにあいて
対手させ、

「買うにも買わなえにしても、馬ば厩さ入っでおいで、話あ家から中でしんべ」
て、出わせだど。ほして、空からなつた厩さ馬ば入れさせ、二人は囲炉裏端さすすめだどごだど。

引いできた馬ば、あれこれど「万才」へげそろみでえに誉めつけっけども、五介あかえつて乗ってくる気配見なえじよん。腹ン中では夜明げだら、ゆっくり見で、氣に入つたら馬喰ばくでもど思てんなだべ。先は赤えお膳こで酒出して呉つて、探り入えつたどこだべ。なんぼ上手え化けだつもりでも、酒が入てがらは、どうしても尻尾も出しやすいもんだ。五介はこ知らぬ振りして酒すすめで氣付けつだど。どうも酒盃持た手見つど、すぽっとして小節がなえようだ。ほれさ、さつきから厩さ入れだ

馬も、おかしいごどだらけた。

昔から言^ゆたじゆんだ。「囲炉裏の横座さ座でいで、厩^{うま}中の馬の面^{つら}見えるよだ家だど福相だ」て。五介も横座がら厩^{うま}中は気付^きつけたべちや。ほの上、何度も厠^{うら}(便所)さ立つふりして、美味^{しみ}そな秣^ま(んまのもの)ば放^{はな}込んだり、秣^{ふる}桶^{おけ}さ米糠^{こめ}どつさり撒^まいで呉^くつたりすんども、馬^{うま}ごとしてはちつとも食^くいつごうとしなえけど。ほれやほのはずで、狐だどすれば藁^{わら}や草葉^{くさ}など食^くうはずなえさげて、五介、まだほれさ、とつくに感^{かん}ついったなだべ。婆^ばさま言^いふぐめで、なんぼでも諸味^{もろみ}持^もてこさせ、狐の大好物^{だいこうぶつ}だていう油揚げ^{あぶらあげ}まで用意^{ようい}して、酔^よつつぶしてやる勘定^{かんじやう}したべちや。

偽者^{いつはり}たち、すっかりその手^てさはまて、じ・ゆ・ん・ぶ・く(十分満杯)なて、やつと厩^{うま}さいる仲間^{なかつ}ば思^{おも}ひ出^でしたんだな。

「まず、出直^{でし}してくつさげ、今日は、んだら、まず」

どて、暇^{ひま}乞^こいしつけど。このまま帰^{かえ}えらつでは、せつかくご馳走^{ちしう}したな台無^{たいむ}しなる。五介と婆^ばさま、よつくと唇^あ合せで、

「遅くなつたんだ、泊て行け」

どて、やあやて（けんめいに）引き止めただけど。偽者たちも、つぶれるくらえ酔つてんだし、少し横なて、酔いさましてがら逃げんべじゅ気起して、ほんでやていうなで厄介かけるごどなたど。ほして案内さつた奥の座敷にや、もう寢床二つ並べで敷いであつじよん。婆さま、まだ、

「あいにくど、枕はねずみに嚙らつたなで、間に合せて我慢して呉つちや」

どて、出したなみだれば、長え匏。まるで頬かむりさせだみでえだけど。ほら、よぐ、小豆や黒豆など入つで、囲炉裏のそばさ下げておくべ。匏の枕なら寝相わりても逃げらんないでええがしんないな。

「ゆつくり休んで呉ろ」

「ほんでや辞儀なし休まへでもらうべ」

て、あいさつ交して、家の人たちは座敷下たべし、客たちは床さ入たべな。ほしたら何だが、におうてじよんな。くんくんて鼻きかへで、かいでみつど、枕の中がら好物の油揚げの香してきたから、たまらなくなつたけど。まわりさわがらなえ

よう音立てないで食うにや、匏はうの中さ面突つらつこ込だ方ええど、みだべな。ところが何しろ五、六升から一斗近ぐも豆へが入んべさげて、奥深えもんで、面突込むどすぽつと、首根くびとまでかぶさてしまた。除とんべと思て、後ひっこみしても、猫さ紙袋みでえで、外はずんなえ。乱気かんぷりなて顔振しても拔なえで、匏あ辺りさ打つかるたんびに、カタンカタンで音出すなだけど。

家の人だち、それ聞きつけで、頃はよしど、用意しておいだ縛るもの持たて、奥さ行たべ。狐きつねごとしては匏冠はうかんて、目隠しさつたと同じこつたさげ、家の人たち、ひつとづも（少しも）難儀しなえで生捕り出来たべ。もう、どげだ事あつても逃げらんないやうに、馬の道具綱むらひたちょうでぐるぐる縛りつけで、土間にわの柱さくぐりつけでおいだど。夜が明けたら集落むらの人達招ひたんで、狐汁きつねじゆして祭りすつとこだべ。それにしても一度に二匹の狐捕とつどは鉄砲打ちだて、滅多なえごんだ。ええ勝負したもんだて喜んだどごだど。

ところで、馬に化けて厩うまさつながつた狐、まだどうしたが、貧乏くじ引いで、ご馳走さありづけなかつたども、危うぐ矢来もぐて逃げたなで、命だけあ拾つた

んだど。

あのな、ええ馬をた[・]で[・]る（飼育）人じゅあ、秣（んまのもの）ばやりつ放ししなえで、ちゃんと、ほの食いっぷりまで見届ける。ほしたら馬まめだか、体のかげんどうだかわかる。五介馬喰、つねづね身につけでだが、大手柄のもどだったんだど。

どんぺからんこ なえけど。

4 屋根の上の狐憑^っき

昔あつたけど。田郎の村境^{さげえ}は沢こ流ってんべ。きつとのごとで狐路^{とも}なてんだ。ほつから廣倉、巢子田圃^{とも}ど広ぐわたて、よく騙^{とも}さつたていう話きくどこだ。向え岸の与吾^{とも}渕^{とも}さも、十五夜さまみでえな火の玉見せらつたどが、薬師さまの森の下さ、六尺坊主の化物ば出さつて、わりいいたずらさつたどがてな。

あつづき、笹山の留親父^{まあ}まだ上^{かみ}からお土産^{つと}苞^さげて下^さてきたけど。ここさしかかったら、もちろん酒入^さてだなさ、名代の場所^{ところ}だもんださげ、すぐと狐のごと頭^{かぶ}さ浮^うだもんだべな。

「狐など出て来^けば出てみる。おれあひつどづも（ちつとも）酔^よてなの居^ゐなえぞ。ほつても（決して）騙^{だま}さんなえさげ」

じゅもんで、よくよく氣^きば張りづめたもんだべ。折^うしも後^{うしよ}がら隣^{とな}りのお父^とさ追^{かつ}ついだど。「道^{みち}連れしんべ」て、声^{こゑ}かけでも、なじだもんだが、つれなぐ振向^{ふむか}ごどもしなえけど。しばらく後^{あじ}立^たて様子^{ようす}見^みながら、ついで来^きたつけや。親父^{まあ}のよたよたじゆう足^{あし}もと危^{あや}なつかしくて、ソリ跡^{あと}さでも踏^ふんごんだら、滑^{すべ}って大變^{だいへん}だ。

「路^{みち}の端^はば、さげで、真中^{まなちう}歩^{ある}げ」

て、氣^き付けでやつと、それもうるさえらしぐ、さりや聞^きかなえで、とんでもなえどさ歩^あつんなだけど。

「親父^{まあ}、ほんでや道^{みち}がちがう。ほっちあ堆肥^{こえ}挽^えき道^{みち}だ」

ていうて、つれもどすべど手^てさし出^ですど、痛^{いた}いほど力^{ちから}出して振^ふり切^きる。持^もた物^{もの}も

ほろぎ落すと悪いさげて、「預て行んか」て、親切に言てやれば、何やらぶすぶす
て、ごしやえで、あげぐにや、「畜生、畜生」て、声高にどなりつけんべ。ほれさ
天邪鬼みでえに、こつちて言えばあつちだもんで、道路なりに歩がないで、雪原ほてやら
ばつぽつこぎ出したけど。持で余して、おれの手におえなえさげ、早く帰て隣り
さ教おへんべ。家族えのひたちば迎え来さすなが一番だ。親父まあどこ一旦本道さ追い込んだどこで、
急いで帰て来たけど。

親父まあどどしては「狐などに騙されるもんか」と、そればかりが頭さこびりつ
いで、他人の親切など受け入れるゆとりなどあらばこそ。狐こどとしてはお土産つと苞欲
しくて、それば手放なさへんべど、神通力えづなかけで道迷わせたり、あるいはいろい
ろと親切なえごがしもすんなだべと、何でも逆に疑なぐてしまう。ほしちや（そうして
は）、とうとう薬師さまの下まで辿りついだけど。

ここはすぐ路の下まへのひこたぶ（凹地）さ家が建つてゐる。でも吹雪溜ほでたなで、
まわりが塞ふさがて屋根ど街道の雪、同じくらえになてしまた。雪原ほでこぎしてきた親父まあ
まだ気付かなえが、そのまんま屋根さ上てしまたんだど。そこの家の人だち、ま

だみしみしじゆ雪踏む音ききづけて、

「なんぼなえだて、こどわりなし屋根渡んな犬畜生が」

て、おかなえ（大そう）ごしやえで、囲炉裏の薪持て出はたけど。ほしたば、人間ひとり、屋根のてっぺんさ仁王立ちなて、藁苞のしあげで、がなつてつとこだ。吹雪でも吹く時なら、道迷たじゆごともあるうが、この日和で、しかも昼日中、何物好きだべ。頭上踏みづげらつちや縁起んなえ。

「そこあ、家の屋根だ。早く下りで来い」

て叫だけど。でも耳さも入んなえ、ただ何がさおびえでるらしぐ、何が言うど、乱気なるばりで、通りがかた人たちも何事起きだけど、動転して足止めだけど。

ちよつとやさつと、屋根下りでくる気配もなえもんださげ、こんだ、家の人だちもひっこんで、囲炉裏さ、やだらと薪やら杉葉やらくべで、えぶしたどごだど。

そのうち、もんもんど屋根の煙出しがら煙り上がたべ。ほれかがせらつで、南蛮いぶしさあたみでえに、親父、やつとさめだが、かたげ悪ぐ（悪びれて）して、屋根下りで来たけど。こん時、どこにも狐の姿など見がけなえがったつけども、

親父どさ神通力かかつて、あげた真似させだもんであんめえがな。留親父じゅあ、なんども狐に騙さった人だつげさげな。

どんぺからんこ なえけど。

5 狐さ手伝た産婆

昔あつたけど。といつても、ほんげに古い話でやなえ。大正なつとの時分だったんだな。田んぼ一枚なえ山ん中さ、にわがに集落一つ出来だごとあた。ほれは大向山の日山さな。あそこは西郡小国以上沢ど、三方さ抜ける峯続きで、こさ官行事業の炭焼始めたけど。秋田だの岩手だのど、ずいぶん遠くの国がらも移て来て、あれで三十軒近くも建ったがな。店舗出す者もいだし、えつくらえの集落こだったけよ。後で事業やめなて、家たたんでどさ移たが、一軒もなぐなたどもな、今もわらび採り行てみつど、ちよくちよく屋敷跡らしいものが見かけられる。栄

えだ當時あだりの事を想うど、まるで夢みでえだな。

その日、山さ、炭焼嬢かがの出産おぼこなしはたどこだど。野崎の内田婆さまじゆ産婆とりあげばんば、頼まって、山さ上のぼたど。とにかく、婆さま上手え産なまへで呉つてな、お祝い一杯出さったべ。女だなえつてして（だてらに）好ぎだ方ださげて、辞儀じんぎなし、ご馳走なだど。何でも、そさ（そこに）婆さまどご迎え来たていう者いだけど。

「下部落さ、もう一軒出産出たさげ、すぐそっちさ廻て呉ろ」
てだど。婆さま、酒のぐりえ（心残り）がったべども、迎え人にせがまとつて行くごどしたべや。ほの使者じや、婆さまど、只ただン仲でなえて噂の立つてる男だつたつけ。山がらの送り人とばことわて、二人だけで山おりだどこだど。

それがまだ陽の高いうちのこどだったつけども、下村したさ来着いだなは、なんと夜明け時分だつたど。なんぼ山路だて言ゆたて、一里あつが、しかもずっと下り坂で楽なはずだべ。女の足だてほんげ時間がかかるわけなえ、どこでなじしてだもんだが、大向の沢ば婆さまひとりで、ぬれねずみなて這えずてつ所、沢側の弥助家で見つけで助けでくつたつけぞ。どこが痛ちぐしたんだ。血達磨ちだるまなてだけど。

婆さまさ、なじ（何故）したながて聞でも、炭たき山の出産さ頼まった歸路だ

けえり

じゅごとわがんども、なえしてこげなおつかなえ（大変な）目にあったなが。ほんで（意識）なえていうなだど。ほのうち、親切に看取てもらたら、なんぼがほんでも出てきたんだ。うろ覚えだども、初めの出産の時から、大して離んなえでもう一軒、どこの小屋だか想い出せないが、手かげらへらった気がしてきたというど。続けで二人もとりあげた上に、片方はずとも難産だったなで、婆さまもたんだ疲れこんで少し休まへでもらた憶えはあつと。でも、それから後、どげえして立つて来たが、迎人とどごではぐったが、いつ、どこから沢渡など始めだもんだが、てんで思い浮がて来なえどごだど。

なお不思議なごにや、後なて炭焼たちき聞いでも、山には出産が二つはながつたていうし、まだ山さ婆さまどこ迎えに行たていわれる男ば問質といただしても、おれなど一日中家ン中で長着物でいさげ、山さなど行きっこなえていうべしさ、婆さまの足どりは、とんと解けずじまい。とうど、人の噂では、てつきり狐に騙さつたべじゅごどえさつたけど。

つまり、山の狐ことしては、仲間うちさ、仔産なしが出はて、ほれが難産で大困りしつたどごだった。そさ、ちようどええぐ、産婆が山さ来たちゆうごどわかつて、手貸してもらたらええがろなたもんであるめえが。それにや、なじして婆さまどこ頼たので来つかだ。まず連れあいの狐どご、婆さまの情夫いふおとしに化げさせで、迎人むかひに仕立て、巢まで連れて来つことだ。もちろん、仔産し狐も人間の出産に見せで、扱あつかがてもらう。ほう言う段取りで事運ばつたなだべ。謎はそうどしか解げなえけど。

でも、狐あ難産だつたなで、たんと出血して、血の氣失なぐしてしまたんだな。なんぼが生血慾よくしがつたが、婆さま疲れ切つて横よこなてるこめえに、下しもがらたつぶり生血吸ひわつたどごだべ。それ困もとで、体ていばばこして、とうど立ち上れないで命落おちしたて言わつたど。狐の悪さも土産と苞奪はくたつるぐらえが関かんの山がど思たらなんとおどげんげんなええ（大仰だいおつな）真似まねもするもんだな。

どんぺからんこ　なえけど。

6 糞ばば詰めた藁わら苞ほう

昔あつたけど。あつどき、ねっずい（しみつたれた）て、ねっずい爺さまいだな、ほれこそ道歩いで立小便すつたて、肥料もつたいないどて、唯ただ所さばしなえ。ましてや、他人ひとの地所など肥してらんなえてだど。わざわざ自分地所わあまで回り道しても堪えてきてたれる。そのくらい氣つけだ人で、誰がらも魂消たまげらつたもんだど。

正月あ来て、爺さま、正月礼廻たじよん。何軒も梯子はしこかげでご馳走なたまんだべ。行た先々から残した肴さかなばお包みに藁苞つとさ包でもらて、機嫌よく帰て来たべちや。んでも、あちこちであんまりご馳走なたせい、途中で出だぐなて、とても家まもで保ちそうながつた風だ。んだなよ、大と小ど一緒だ。ほんでも、今日みでえな格別ご馳走きの効いきでる肥は捨てて行ぐなんて、もつたいなえ話だ。考えつど、うすい方ならまだしも、濃い方は何とか持たがて帰りだえもんだど。路端さあつた、どごがの家の藁わらにおから藁引わらひつこ抜いできてな、苞こばこさえ、そきたれで持たがぐこ

どしたけど。

いよいよ、腹ハ中キリキリと鳴って、どうしても我慢できなくなつた。人眼にかなえように、ほてこハやらハ（雪溜り）さ踏みこんで、しゃがまて野糞したど。用達してがら、尻拭う物もだなえなさ気付いで、傍のやつこい雪搔ハつさらて、握て、それで拭て始末したとこだど。

ところが何時も、喉かわぐど雪玉握て嚙かじんな癖で、そればあぶなくかじつどごだったじよん。ハツと気付いで捨んべどしたども、肥料分こやしけついでつさげ、いだましぐなたべ。思い止まて、この雪玉も持たぐごとしたど。糞苞ばはつとと、それに家々のお土産苞つづみと持たなで、同じよな荷物が数なたべちや、苞さげた手、くたびつて持ち替つえつ時など、初めよく気付けで扱てだつたども、やがてにや、どれどれが見境みさげつかなぐなたんだは。

そのうち爺さまの持ち田ばすぐ目の下にした前坂のどさ来たけど。肥ばこの田さ置いて行くべど思もてな、まず雪玉の方ば、高みからボエンと投げでやたど。ほれがうまぐ水口みづぐちんどさ落ちだなで、あそこなら雪解とけつと肥料分こえけみな自分わあの田さ

入っさげ、一番良えていうなで、苞もその辺をねらて、反動つけで投げてやたど。

これもうまぐ届いだなで安心したべ。やつと腹ン中まですっきりしてきて、氣持よぐなてな、爺さま家さ着いた時にやくぐぬぎ唄（鼻唄）だけど。

上機嫌で、「婆あ、今きたぞ」て、戸の口開げるなり、お土産苞つき出してよごしたなで、婆さまもニコニコで迎えて受け取ったべちや。

「こんげにいっぺえ、ご馳走あっこんだら、ばんげ何もしつことなえはな」

て、さっそく炊事場で開けてみだどごだど。ほしたば、とんでもなえ臭えおした一苞出てきたべちや。婆さまカンカンなてごしやえで、

「どこの家で、こげたもの包でよごしたどごだ。他人から怨みかう覚えなどなえ」
て、力むなだけど。ほして、このおした苞あずげでよごした家ば思い出せどて、爺さまどごば、でぐる（攻め立てる）ども、爺さまごとしては精魂拔がして、ただキョトンとしただけど。

なんぼなえだて、正月だでは、縁起でも無え、こげだ真似していしやたがる（か
らかう）人も居めえ、家の爺さま、酒呑むど、たわえなぐなっさげ、途中狐に逢っ

て騙さんなえども限らなえ。よぐ酒酔人^{さげよつと}まだマンジュウのつもりで馬糞^{だんくそ}あづけらった、なんて話きぐども、婆さまの口説^{くどく}なもほのごど想い浮がだかもしれなえ。爺さま、まだちちやこぐなて、おそこ知らぬ振りしったけど。それでも心では、あれこれねつづぐ（詳細）思い返してみだけべ。

はでさて、ほの苞^はばこさえだな確かにおれだ。ほればどごとう取っ違えでしまたがな。ほっちの手こっちの手と渡し替えだ時がな。ど、いろいろ考えれば考えるだけ、こんがらがって来て、わがらなくなるばり。田さ投げつ時に、も少し念おせばと悔^{くや}でも、もう遅がろ。いまさら田んぼさ行て苞取りかえでくんなもおがしい。いっそ、このまま狐のせいにしてた方がええがしんなえていう気なたんだな。

狐こそ迷惑な話で、爺さまが田さ投げだなお包みは、後で見つけでご馳走なたがしんなえ。でも自分^わから人騙して、糞苞^ふまでつかまえるなて、ほんな狡猾な真似はした憶えはなえ。「皿なめた猫^{ねこ}」て言うんだ。とんだ濡衣着たもんだでやな。

どんぺからんこ なえけど。

ばばさの 炉辺むがし(-)

婆さまゆろり炉裏端ばたで 火の番しながら
麻桶おぼけかがえて麻糸を紡む

その傍で 童たちがむがしこをせがむ
するど 火箸 灰ならば小道具にして
ドンペカランコは なんぼでも尽きない
もし、ほごさ孫嫁でも一緒するよだど
きつとの事ごんで「お婆さんの智恵」を
伝えておぐべ と、いぎなて（いぎり立って）
語りはいつそう張りが出たもんだろ

1 正月の田の草取り

昔あつたけど。囲炉裏汚ゆろりしておぐど、田さ雑草生えつどてな。囲炉裏の掃除ば、嫁この持ち前に決めでる家あつど。

その家でや、まず朝間起つど一番に灰としすんなだど。灰ならし使て、さなぶりつぎ時の田圃ともでみでえにきれいにならして、そさ塩水ぶっかけで清める。ほのくええ氣つけたもんだ。

あつづきな、爺さま、嫁こ連れで、二人で田圃さ稼ぎ行ぐことなてたけど。でもにわかえ用事出来で、嫁こひとり田の草取りやたどごだど。

一番草、二番草はねつぐ取れていうもんだども、「三番草と十八娘は、かんなくり放題」ていうて、留草なつと搔廻しただけで良えもんだ、て、教おへでやたけど。んださげ嫁こもほの氣組でとつかがたべちや。

やがて夜上りして来たでば、爺さま、さつそぐ、「ひとりで楽らくがつたべ。どごまではがえつた（進んだ）がな」て聞いたど。嫁こまだ「仏草と祝い草残して、そ

そくさど出来したどこして、上がて来たどこです」て言うけど。

えごは仏さまの鏡どて、仏さまの大好物だていうたもんだ。んださげ、えご草ば仏草だ。まだ沢泻は祝い草じゅもんでな。祝言の時、和紙で沢泻の花こさえて、島台さ飾て祝うべちや。ほれ二つはわざと取らなえで残してきたという。嫁の頓智の良えなにや、爺さまもにつこりしたけど。

とにかく、囲炉裏ばいつもめんごげしておかなえど、田の草生えらったら大変ださげな。小正月の十五日の晩に、百姓家でやどこでも「田の草取り」どて、囲炉裏の大掃除すつてや。

明りうちに、屋外で雪中田植して、晩げにや田の草取つとこだべ。遅ぐに寝しな、その家の田さ下る稼手みんなの手借りて、囲炉裏の灰ならしする。春に学校卒業すん者いっと、「今春から大人さかぎて田さ入らんなえさげ」どて、寝だなも起ごさつて灰ならし持ださつたんだ。

田の草取りすまへだら、「杭掛け」どて、串刺の田楽餅でお祝いする家もあつてや。明げれば、童たちの鳥追いだじゅんだ。百姓のまつりも、昔あみな順序あつ

てしたもんだ。

どんぺからんこ　なえけど。

2　朝茶の功德

昔あつたけど。或所^{あつどし}さ、爺と婆あいだけど。家のそばさ大きて大きい松の木生えでいでな、それじゆもの、高砂の爺さまど婆さまの住む家だったふうだ。

或時、どうしたごんだが、家のまわり一面さ洪水押しよせで、まるで泥海さ浮いでるみでえなだけど。ほして松の木さば、大蛇^{じやだえ}よじ登って、家ン中ば覗^{のぞ}こんでたなだけど。なんとがして中さいだ人間^{ひと}ば呑み込むつもりで、ねらったなだべ。

家ン中さいた爺さまも婆^やさまも、ほれさちつとも氣つかなえ風だでや、おっかなえごんだ。なじしんべて言^ゆたて、爺さまなど稼^もぎ出^もんべど思^もて腰上げだどごだど。ほして戸の口出はりがげたどき、中がら婆さまは声かけたけど。

「爺ッさ、爺ッさ、お茶のんで行げ」て言うけど。爺さまも、せつかくだと思て、家がら出んなやめて引込で来たけど。とごろまいで、出はて来たどこ一呑みとばり力んでた大蛇ごととしては、あてはずってしまったべちや。

ほれどころが、いま婆さまの言た言葉がなんとしても気さかがつちよん。

「なえだどや、大蛇呑んでがら行げ……」が。ふしぎなごんだ。ここにや、おれよりもまと（もつと）大きい者いんなでなえがな。大蛇呑めとは、これや大變なこったぞ。人間ば呑むどころか、早く逃げなえど、こつちがやらつでしまう。大蛇ごどしては何ば勘違えしたが、さつさど、どさが姿くらましてしまたけどは。

お茶は邪気はらうーて、大蛇追つばらたわけだ。爺さまだて、戸の口がら引返したさげ命拾たべ。「朝茶は七里戻ても、ご馳走なれ」てな。しかも「朝茶は二服」どて、なんぼ忙しくて腰落着けでらんなえ時でも、急須をしたんで二服にしたごどにしたたていい、仏さまの二服茶にはなんなえようにだな。

ほれがら、「朝茶三服呑んで出がげで、もし怪我でもあれば、北野の天神ないど思え」——三服呑んでも、何があたら、そんな時あどうしても避けらんなえ災難だつ

たと諦めるよりしようなえていうごとだんだ。朝茶にや、ほげた曰くあんなだど。
どんぺからんこ　なえけど。

3　山野でつかう箸

昔あつたけど。弘法さまて言う偉い坊さまが、ある時旅してらして、河原で昼飯^{ひる}つかうごとなてあつたど。土手さ坐て、きれいな川の流れば眺めながらど思て、包み解いでみだれば、箸忘つで入つてなえじょん。

代わりするもの何がなえべがど周り見まわしたら、すぐ傍さ笹やぶあつさげ、そつから良えよなえらんで、二本手折てきたど。ほの箸で、まず入れもののふたさくつついだ飯つぶば粗末しなえで拾たべし、弘法さまのごんだ、どさもこぼさなえで、さつぱりと頂いだべ。ほれでも念押して、食い終て箸ばよつくなめで、川さ流したけど。

でも、ふしぎなこともあるもんだ。投げた箸は下流しもさ流って行くな本当だが、なぜしたが、流れが渦巻いで、逆流してもいないのに、上流かみの方ちゃ浮いで行くじよん。弘法さま、これは何があんぞと思て、追おかげで川さ手つっこんで箸は拾い上げてみだごだど。

ちよつと見は別に変たところもなえけども、ね・つ・づ・ぐ見たれば、なるほど、笹だもんださげ、中が胴うろで穴あいでる。そこさ御飯ごはんつづ詰ったな見つけだど。

きつとの事で、これだ、これだ。気がつがなえど重え罰かぶるごとした。これは神仏おへんの教訓にちげえない。弘法さま、そう悟つて、その箸はおし頂いてから、口で御飯ごはんつづは吸い込んだごだど。ほれがら箸えば川さ入えつたら、こんだはすいすいと下流しもさ流って行んけど。

これがら二度ど、こうゆう粗末なつこどしなえがらど、弘法さま手合わせで詫びで、ほつとして、まだ旅続けなさたけど。んださげて、笹竹みでえな胴うろなもんで箸使うな気つけなんねな。川原で飯食う時、なんと箸こさえつと良えがていえば、柳などだど、え・つ・べ・え生えでつし、枝こもまつすぐで、手ごろのようだども、

柳箸あ仏さまの箸で、罰かぶつといげなえ。うつぎも良きそうだども、これまだ、灰寄のお骨ひろいの箸にするもんださげ縁起わるい。他のもんでは、川原蓬の枯茎どが、もぢろん萩などは良^えがんべちや。

んでやな、山で昼飯^くつかた後、箸ば二本そろえて、真中から折りがげで投げてくんべ。あれは、なしてだて言うどな、山姥^ばみでえな化物に追^おかけらんえ呪^{のろ}だど。

青物採りや茸採りなど行て、普段、人間も通らなえよな汚れのなえどごを荒し廻^{まわ}つさげて、山姥^ばばごしやがへてしまう。ほして弁当^{べんとう}つかた人間の匂^{にお}いかぎつげらつて、後追^おかけられる。そんな時、捨てた箸ば化物が見つ^みけつと、奇態^{きてい}に足あ止まてしまふなだど。

箸まだ真中がら折れで曲つてつさげ、への字の形なつてんべ。ほれ、二本合わせたら、口の字になんべよ。いま昼飯^{ひるま}して行た者は、こげた口してんなが、これあ人間よりま^まつとでつけれ（大きい）生き物にちげえなえ、これでや追かけでみでも、とてもかつがれめえし、たとえ手向^{むか}ても勝味がないど諦めて引返して行くど。

んださげ、山で弁当つかたら、ほごさ箸ば折りかけて置いて来るもんだてな。
どんべからんこ なえけど。

4 姉と妹の豆煎りくらべ

昔あつたけど。或時、あつづき姉妹二人、囲炉裏端で、薪さつくべて、釜こ歌わへながら、暖つたけど。

「釜こ歌うど、福逃げで隣家ばり福しぐなる」
て言たもんだ。火もつたいない。どうせただ温てんなら、豆煎りでもしろちや、
今晚、よりぎ寄合宿あだてつさげ、お茶うげも要だ。よどて、親だち煎鍋と大豆出してきて、
姉妹二人さ預げだけど。んでや、二人で豆半分ずつ分げで煎り競争しんべど
なた風だ。

まず、姉は姉の分際として妹えなど負けてらんなえていう氣起して、やつきど

なたけべ。かぎのはなさ鍋ばかりるや早く、薪火でば、だ・が・す・か（勢よく）ど燃して煎ったどこだど。火強くて、たちまち黒こげなてしまたなで、ホリヤ煎れだじよんで、大急ぎで鍋がら豆あげだべ。んでもせまで火通てなくて、食てみると、生臭えがつだど。

妹の方は、どっちがて言えば、姉より氣持おっとりとしてつか、あわてないで、遠火で、鍋中の豆プリンで音立てつと、カランコロンと搔廻していたじよん。そうやつと、豆のふ切れで良く煎れるわけだ。黒こげな一粒も出さなえし、ほれさちつとも生臭ぐなどなえべじゆ。

これば見でだ親達言うけど。物にや何でも加減じゆあるもんだ。強いなの、早いなのはり良えどしたもんでなえ。姉の方は負けらんない途から、ら・っ・ば・氣・出・して、しくじり、軍配は妹の方ちや上たもんだな、て言うたけど。

どんぺからんこ　なえけど。

5 小豆は娘に煮らせろ

昔あつたけど。或時、嫁こ小豆煮あづきば言いづげらつたけど。囲炉裏さ小豆鍋かげで、薪焚たいだべちや。嫁こごととしては、他にもしねんね仕事えつぺあつさげ、どうしても囲炉裏さつきつきり坐てるわけにやいがなえがつたべ。

んだがて、火ば切らしてしまうど、小豆じゅもんは、あんばえごわえどごあつて、一ど煮そびらがすど、ながなが上手にや煮えなえもんだ。囲炉裏が少しも氣拔ぐごど出来なえ。どうしても、があつと一ぺんにさつ焚くべだぐなるじゅもんだ。

んださげ、鍋いせ中、威勢いせいよぐたぎつて、豆まだぐるぐる舞いするし、頬ほ被かりが解ほけでふ切つて、散々に碎けてしまう。粒割れで豆あ殻になつと、どうしてもごう減へつて美味ぐなえもんだ。沸き上がった豆屑くずでば、鍋のふたさまぶれでしまて、始末おえなぐなる。ほれさ崩くずつたわりにや芯までやつこくならなえしな。出来上りの品のなえごとてあたもんでなえ。

いつが、こん度は嫁だこでなく、家の娘に小豆煮命じだど。良え面しなえがったども、言いづけらったもんで、やんだやんだ火焚たききしったべ。自分わあ好きだごどしながら、囲炉裏端はなんなえで、火は切らさなえ程度にやわらがく焚たきしったべちや。長えごとかかつて、こげらがすなばり氣つけで。煮干りそうになつと、釜こから湯足し足し、コトコトど煮ったべ。ほしたら小豆あ砕ふくげなえで、一粒一粒ふつくらと脹ふくつて煮上ふくがたけど。

ほごさ大きい婆さま面つら出して、「ぢよこ、小豆煮えだ、んなえが」て言うけど。ほして鍋のふたさ小豆粒のせて、豆粒拾つて親指と薬指さはさんで潰して煮えあんばいみったけや、とつても上手に煮えだどて誉めでな。

「小豆あ嫁こに煮させなえで、娘に煮させるもんだな」つけど。ほれ聞きつげだ中の婆さま、まだ「こんど時づき、おれあ上手え煮でめへる」て、いばつけど。

さて、ほの口きいだ姑嬢かがさまの番がきたど。若もえ者達んだにや負けでらんなえ、誰だよりも早く上手に煮上げて見へんべじゆ氣だつたべ。だが、すか火焚たきいだしょん。一番や、つちや、なぐ出がしたけど。

小豆煮にかげでや、姑も嫁にやかなわなえがつたじゆし、何て言たて、娘こあ一番だて言わつたけど。

どんぺからんこ なえけど。

6 大根の逆さおろし

昔あつたけど。或所^{あつど}さ、男の兄弟二人持た家あたけど。兄まだ少し頭が甘こえもんで、年頃なら、弟の方が先に決まて、嫁^{あね}こもらうごどなたけど。

今日あその祝言だじゆ日だど。兄あごとしては、弟に先きならつても何じゆごどもなく、機嫌よく家の事ばあれこれど、こまめに手伝^{てつでと}てだけど。

秣^{うまもの}やつたり、何度も何度も土間掃除^{にわ}など出がして家さ上て来たべ。炊事場^{ながし}の方ちやも、たんと手伝^{てつでと}人来て、にぎやがしつたもんださげ、そさ加^{かざ}つたえがつたべちや。

「何がおれあ手伝うごどなえがや」

どて、顔出したけど。

炊事場のさいはい振つてだ本家の婆さまも、こんげして不貞ふてもしなえで、よく働ぐどご見つど可哀いじくそうなたべ。炊事場さ男人たちに手出されつちゆあ邪魔氣だもんだども、大根下ろしなら、馬鹿でもチョンでも出来る仕事だ。これ預げでおげば、場ふたぎにもなるめえど思たべ。兄もまだ人並に扱おもへわたた面白くては、一所懸命なたけど。

でもな、大根のたがぎようおかしい。頭の方から下ろし金さ当てすつていだようだけど。他はたの人、ほさ氣付いて、「兄ンさ、大根、さがさまんなえがや」て言ゆた者いたじょん。ほしたば、兄ンさ言うけど。

「おれあ家じゅあ、何もかもみなかつちやまな家だ」てだど。

なんぼ出来あ甘こえたて、長男は長男、預けるものは預げなければ、なや。兄ば後回しさつた、あてこすり言つたどごだべ。何もかも合点しでだなだな。

大根下ろしは、尻尾の方から摺るど、辛く出来るがらて、師匠する者いっかと

思うど、北向きに坐てて下ろすど、辛えなの、意地のわるい奴ひとの摺すりったなだば辛えなどで、話あはずんだど。

どんべからんこ なえけど。

7 納豆なづねへの元祖

昔あつたけど。馬喰こやまだ馬こかつて、これ肥育こやして、七折返し八折返しにも高く売てもうげんなだけど。

あるづき、飼育あづげえよく、大豆まめなど煮て食べだべちや。ほしたら中に選えり好みする悪い癖くせの馬こいで、かんぶり振ふるつて飼桶おけから大豆えつぺえ溢こぼすじよん。

ほの豆、厩まやの隅すまこさもこつとなて溜ためつたつたべ。馬喰あ見つけで、「この畜生、もつたいないごど」どて、しゃぐり上げでみだれば、豆あ糸引いで粘ねつちよんな。これあ何たあんばいだと思つて、よく嗅かいでみだどて、何となく美味んまそな香しつ

ちよん。そこで豆ば指でつぶしてみたべ。ほしたら変味すれでないなえ。何ともなえやだ。かえって前より芳し匂いする。これを投るにやもったいなえじゆなで、別の馬こさ、ちよべつとやつて試みだごだど。ほしたらその馬こまだ喜んで、ま・と・(もつと) 欲しいどて、はだる(催促) けど。

んだらばどて、こんど自分わもちよべつと試してみだべちやな。舌ざわりといい、味といい、これあたしに食けんぞ。ただの煮豆どとんとちがてしました。煮豆が藁の上さ溢あふつただけで、こんげになつこんだらば、初めつから藁苞さでも包で、ねへでみだら、もつともつと美味んまぐでぎんねがてだど。ほつから納豆じゆもの工面さつただけど。

んださげてな、納豆ねへるにや、苞つと包くるむ莫包みの中さ、く・つ・わ・や・た・て・ご・など、馬具入れだりする。まだその包みばまるたり、囲炉裏端さ下げだりするのにも、馬の道具綱一式使うど、納豆はよぐ粘るどしたもんだ。そればりが、

へ カンブネザの奥までも

馬々 糸引け 糸引け

この呪文ば三度唱えて苞作るじゆど、よえていう秘伝使う人もあつと。

カンブネザじゆあ川舟沢（部落名）のごとで、昔あ小又川も川舟はここまですかのぼらなえがつたど。こげた奥までも糸長ぐ引いで行くようにて祈んなだべ。こげに納豆ねへる呪文も秘伝も、馬さかがわりもつどこ見つど、この話あまんなら嘘んなえんだな。

どんべからんこ なえけど。

8 ふりもどの発明

昔あつたけど。或所さ、乞食いでな、今日たとつても、もらいの良え日さあだて、握飯食い切んなえけど。乞食腹で言うども、なんぼやつきどなてみでも食が残たじよん。

投げるなも、もつたいなえし、たとえ小鳥に啄つてもええ、もしかして野ねず

みやリスえでも発見みつからねば、もうげもんだ。ていうなでな、ほの残た握飯ば傍の大樹の股へこたひさなつた凹味さ、はさんで隠しておいだけど。

でもな、乞食こじきごととしては、あっちこっち村替えして、もらい歩くべ。しばらく寄りつかないでいるうち、百舌もずのいげにえには、ほの事ば忘つてしまつたんだ。でも何時がまだ元のどさ戻てきたべちや。

涼しい木陰で一休みしてつど、何とも言えなえ良い匂いきけでくつちよんな。小鼻えがびくびく動して、匂て来るもどば探してみたべちや。

あらつ、この大樹まだいつか自分わあ握飯残して行た樹んなえがや。きつと、んだちや、これに違えないで、想い出して覗かたがてみだけど。

なじなたんだがな、今日みでえな天氣の催た変りそな時にや。あの握飯があれこもば出あるぐごどもなくて、うんと助かんども。想いばかり探したべちや。

ほしたれば樹の股の凹味さ雨水だが、樹液だがひたてしまて、握飯あちゃんとした形してなえけど。でも、そごら一面さ、とつても好え香りさせでつちよんな。握飯なじ化げだが知んなえども、乞食まだほの溜りさ指つつこんでちよつとばり、

なめでみだどこだど。

これあ美味い、こでえらんえぞ。これで命とられるよなごどあつても諦めつく。ていうなで、指一本のひと一なめりが、葉っぱで杓しやくて呑むよなたけべ。ほしては、あどあど（もう）一杯、あど一杯て、汲み重ねんなだけど。ほのうぢ、とつても良え氣持なてきてな、これあ極樂だじゆなで、味あじひここんでしまたけど。

ほの次も握飯もらうど、こんどあわざわざ残してきて、ほこの大樹の股さはさんで置きおぎしたけど。握飯まだ酵ふりもと母なて、ひとりでわいわいで濁酒になたなだべ。んださげ、昔の人たち、握飯で酒造る術ば乞食がらきいでおべだなだど。

どんぺからんこ なえけど。

9 大昔の根花粉

昔あつたけど。昔にやな、蕨わらびのとうの立つたなば、「ほうだる」どてな。土ン

中這つてゐる根っこば堀り上げで、ほれよつくど洗てがら搗きつぶして沈澱いづかせつと、きれいな澱粉こな出来だもんだ。

根花粉どて、とっても高え値段で売っだし、この粉で「かい餅」こさえて食うど、ほれこそ美味くて、ほつぺた抜げるよだんださげ。一時いっときにや、根花も相場立たくらえで、とても金になたもんだ。田作るよりましだどで、小百姓たちあ、我も我もど根花堀りさかがた時あんださげな。

ほの根花も、ずっとの大昔にやな、土ン中の根っこさ着いだもんでなくて、元は地面から表の方ちや、つまりほうだるの枝の先っぽさ花咲がへで実もたもんだど。ほうすれば、手も汚さなえで摘めっさげ、採んのにや随分と楽しんだにちげえなえ。

ところが、人間にや無精たがりがいでな、ほうだるの木の下さ横なてふんぞり返つたまま、手も使わなえで、パクパクついばんで根花食う奴出なはたけど。よぐよぐへやみたくたごとするもんで、神さま、これ見つけで、とってもごしやえだど。

ごげたごど平気でさせでだんじや、人間のこれがらの為になんなえてだど。ほごで、みせしめに、地表さみのた根花ば、みんな土ン中さ潜らへで、根っこさ隠してしまわったなだど。

今は根花採っどなっど、大変な手間かげっちゅんだ。まず山さ行て、ほうだるの根っこ掘って来て、ほれば川さ運で、ねっづく水洗いする。ほうやって泥土落したなば、根舟ていう臼で搗ぎ碎いて、ほれいづかせつと固まつさげ、水がら上げて、天日で乾がして、やっと根花えなんなださげてな。二重三重の手数かかるごとじゅんだ。

神さまの諭さとしだつたさげ、仕様ながつたろ。何だて不精なごとはさんねもんだな。どんぺからんこ なえけど。

10 小豆餅と灯持ちは先導

昔あつたけど。上の家の爺ンちゃん、まだとっても餅の好きな人でな、まだ若え時分のこと、こげたごどあて話残した人だけど。

或時、^{あつぎ}若勢^{わかぜ}ば連れで町さ用達に行き、帰り途暗ぐなんべじゆなで、^{たいまつ}松明用意して背負せで行てあつたふうだでや。日の短い時だもんださげ、村境の桧の沢ささしかがたら、もう足元見なぐなて、歩きづらくなたけどは。ここは昼間でさえ、木のしげみで陽も当らなえうす暗がり^{あがり}で、やんだ所^{どこ}だ。川向うの中ノ瀬あたりの灯火もち^{あがり}らほら見^めできたけどは。

こんど、どこが道端の家の前さしかかたらば、松明さ火つけてもらうべなて、連^{つれ}ど語て歩いてきたどこだど。

この日あ餅搗きの日だったんだな。ベツタンコ、ベツタンコど、あちこち威勢の良え杵の音きこえてきたじよん。もともと餅好き^{すき}だなさ、空腹ときてるから、足まだひとりでトンカトンカと、そっちの方ちや向いで行くよなもんだ。餅搗き

の家の前さ來かがつど、若勢の背中から松明ば抜いで、

「おれあ火つけでもらつてくつさげ、そろそろ行つてろ」

どて、ひとりほつちや曲むじて行たけど。

んでも、餅のごとしか頭かぶン中さながつたべちやな。大戸潜て行きなり、

「お晩です。松明さ餅つけて呉っちゃ」

て、松明つき出してやたごだごだ。囲炉裏から松明さ火移してもらいだくて、火つけで呉ろて言うなだつたべども、心さこもつた餅がふつ切んなえで、うっかり言葉えなつてとび出してしまたごだんだ。

餅搗きの手返ししてた若え嫁こなど動転して、なして松明さ餅くつつけんなだべて、キョトンとしたけど。さすが、婆さまは年の功だもんだ。

「ちようど良えどき寄てくつた。今日はごだて餅振舞いだべども、おらどこのも味見で呉ろ」

どて、とりなしてくつたなで、ほつとしたべちや。囲炉裏端にいだ爺さまが手出して、松明受けだども、火ばつけで呉れようどしないで、「そのまま、踏ふン込め」

つけど。履物のまま囲炉裏さあだるよう、すすめで呉ったなで、引込みつかなく踏んごんだとこだど。

ほのうち、搗けた餅は神さまさ供えでから、婆さま、お膳こ出してきて、

「松明さつけんな、何餅ええがな、小豆好ぎだが、納豆好ぎだが」

て、おどげつけど。さだげなくて（恥ずかくて）少しもじもじしていたら、爺さま、すぐど、

「松明持ちと、小豆餅あ先導ていうさげ、小豆餅先ぎだんだ」

て、言たなで、まず小豆餅を盛てすすめで呉ったけど。

小豆餅じゅあ、祝いのものとされでつさげ、何た餅好きだたて、一番先に小豆

餅がらご馳走なるもんだど。灯持あかりちも先さ立たなえど、他の人達、足元暗くて、や・じ・や・が・な・え・も・ん・だ。

どんぺからんこ なえけど。

11 大黒さまの嫁こ

昔あつたけど。大黒さま、旅さ出らつた時だど。この日、餅搗きだつたとめえで、どさ行ても餅出さつたじよん。

辞儀して、さっぱり口にしなえも悪いと思て、行く先々で、じゅんぶくなたども、我慢して頂いたふうだちやや。

ほの無理ただて、腹さげるほどくちぐなて、あげくにや、七転八倒の苦しみ、悩みだけど。こういう時、大根さえ食えばなあど思い、どごさが無えんだが、氣つけたど。ほしたば、良えあんばいに沢つふちで、姉こ大根洗いしつたな見つけたど。これあありがたえちよんで、そばさ寄てよつくど、わけば話し、その大根一本分げで呉ろて頼だけど。

姉こ、ほれ聞いて言うにや、

「気の毒なこんだ、んでもな、この大根はおれの物でなえさげ、旦那さまさ、こわりなしで、上げちゆわけにいがなえ。これだけたんとあつても、ちゃんと数

かぞえて、あずげらったなだ。んださげ意地悪いごとするなでなえども、どれでもていうわけには参らなえなよ。んでもな、股大根まつかだて一本が一本だべさげ、ほればボキンと折つたて数は減りはしなえんだ」

どて、股大根の良さそうなえらんで、かいで呉つたけど。

この姉この機転のおかげで、大黒さまも腹やみもおさまて、大助りしたけど。いよいよそこ立つ時づき、「何もお礼するもの持てなえども、餅食う時、大根欠がさなえど、腹はらさもだなくて良えもんださげ、おべでおくどええ」て、教おへでくつだけど。

ほれがら、姉こまだ大黒さまの教ごとば、ほごらの近所の人達さも伝えだんだ。

この村でや、どこの家でも、餅振舞いの時にや、今もきつと短冊大根の味噌汁作り、最名餅とめもちは大根おろしを使った「ざい餅」か「絞り餅」で食いおさめるごどにしてくだでや。

ほれさ、大黒さまのお年越には、大黒さまの嫁取りどて、股大根まつかば供あげでお慰めするごとしてんなだど。

どんぺんからんこ なえけど。

12 宇賀さまの餅

昔あったけど。正月の十一日は「農始のぼりぎ」で、一番鶏鳴ぐつと、男人達総出で、堆肥こえ背負いするもんだ。上がつてくつと藁仕事に移て、朝餉にや堆肥背負いさ加かざた人達さ、宇賀の餅二つずつひいでお祝いするでや。

宇賀の餅じゅあ、丸いこ餅もちば一と所ところ凹へこまへで、鎌形にとる。そこが水口じゅわ
けで、昔よぐあつた段々がっきた田の形さなぞたもんだべ。

囲炉裏で、ほの餅焼いで食うべどしたどさ、客ひと来たけど。いつもお父さと連
なて山さ稼いぐがたけぎ行く人で、今も誘いきて呉くつたどこだべちや。餅好きな人でな、餅
て言うど、何食いぐがたけ続いても良えていうくらい、目のなえ人だったど。

こういう時は、皿こと箸、すぐ出てくんなどども、多分宇賀の餅は家の人数さ
合わせ、特別の恰好でとるもんださげて、客ひとさ出すどこなどながったべ。

「今日は宇賀の餅ださげ、他人ひとさば上げらんなくてな」
て、家の嬢さ言うけど。

客はてつきり好物さありづけんべと、ほれこそ舌なめずりしったったべ。ほご
見せづらがさつて、よつぽど気さかがであつたろ。とにかく、それでも二人連れ
立て山さ向たふうだ。

ところが、餅食せながつた家のお父さが、荷物背負つたまんま、雪道足すべら
して、さら転でしまたごだど。ちよつと手借してもらうべと思て、自分^{わあ}手出し
たども、連れでば、何と思たもんだが、

「今日は宇賀さまだもんな。なんぼ助けでやりだえど思ても、今日ばりは出来な
えつけもんなあ」

どて、つれなぐずんずど先ば歩いて行てしまたけど。

餅のやり返しのもりで、ちよつとからがたごだつたべ。でもな、宇賀の餅
じゃ、その家の堆肥背負さ加^かざた人んなえど食んなえどさつたもんだ。男わら
しだち、ほの餅欲しくて、小^ちちやこい堆肥俵こ作てもらて、背負て、田さ連れで
行てもらたもんだ。してみると、堆肥背負いは百姓おぼえる初めでもあつたんだ
な。

どんぺからんこ なえけど。

13 みづ食い過した大蛇

昔あつたけど。餅こもちていうど目のなえ樵きつきり親父おつづきいでな。或時、山の神さまあさ供あげ
んなださげどて、丸餅こもちは大振りに十二もとらせで、山さ背負て行たけど。

へ 十二山の神の勸進かんち 祝てたもれ 祝てたもれ

樵小屋さ着いだら、さつそく山の神さまさ餅あげで拝むながど思たば、荷物お
ろすええがも早く、餅あぶりさかがたけど。神さまさより自分わ口あの方忙せわしなくてな。

十二も持たてきたんださげ、一つぐれえ何ちゅごどなえべじゅごんだべ。あぶた
れば、とつても良え香りしてきたじょん。これや一つじや我慢できそなえ。も
う一つさ手伸びだど。どうせ二つ食たて、後さ十も残るんだもの、ほんほんげにや
目につくまいじゅどこだんだ。ところが、あんまり美味んまくて、

「見だもの三つ」て、もう一つぐらいはど、まだおまけしたごだど。ほしてや、残たな勘定したつけや、九つでや「苦」で縁起悪いさげ、もう一つ減らした方ええんだどて、なんだかんだ自分さ都合の良え屁理屈つけて手つけんなだけだよ。

あげぐにや、十二の神さま達、喧嘩なつと悪いさけ、どうせこうせ、皆平らげんべなどて、一つ残さずいっぺんに食てしまたごだど。

普段よりも大振りにとらせだ丸餅ださげ、一升餅はゆうに越してる。腹くちくて身動きなんなえもの出来たべ。こういう時は「餅食て寝なえ者は馬鹿」ていうさげ、横ンなることだどて、仕事ば休でだど。小屋の土間さミノ敷いでひっくり返て高いびきだけど。

ほごさ匂いばかぎつくだ大蛇這てきたけど。鹿でも猪でも丸吞みするくらえだもの、人間だて楽だもんだべ。まして親父あ眠たまま正体なえさげ、大蛇まだ大口あげで一息に吞みごんだど。

なんと、あれほどの餅食たばりの人間ば丸吞みしたさげ、大蛇も腹一杯で大変

だったべちや。体むじん^んなも楽でないがったろ。ほごで、下の谷間さおりで行て、みづ（うわばみ草）探して食う勘定したけど。

蛇あ、何蛇でもみづが好物で、何か大喰いしたり、消化わるい物なの呑みこんだ時にや、きつとみづば食うもんだど。山さみづ採り行たら、まず蛇あ葉っぱなめだ形跡^{あと}なえが、よつくと見とどげでがら手かけるもんだ。あわてて隠つてだ蜷^{くつへび}に手噛まれる災難さあわなえども限らなえさげな。みづ採りはくれぐれも蛇さ気つけらんねもんだぞ。

とにかく、ほごにやあんばい良^えく鎌で刈るくらえも、どつさり生えつめったけど。大蛇^えごととしてや、これまだ卑^{えや}しこえで、長ンげえ胴腹。パンパンと張るまで詰めごんたどこだべ。とうど食い過しては、そさ伸びでしまたけど。

なんせ、体の内外^みがらみづさ漬たもんだもの、薬も効ぎすぎで、やがてにや自分^わ体まで溶けで形なぐなてしまたけど。もちろん、腹ン中の人間も溶けでしまたんだな。ただ餅^{もち}ばりちよこんと草の上さ格好変えで残つてだけど。

これみつど、みづつてよつぽど消化良^{こなれ}えもんだべな。他の野草^{くさ}どちがて、冬枯

なても、みづ殻がらて見へなえ。ほれで「みづ」という名ついで言うさげな。
なんせ、十二の神さまさ、餅供あげなえ罰かふて、こげな始末なたつたべな。
どんぺからんこ なえけど。

14 熊茸ししだけの由来

昔あつたけど。この山ん中さ生つて、都さ奉公出さつた娘おぼこいだけど。よぐよく在郷衆だども、何た縁があつたもんだがなや。身分の高え公卿さまに見染めらつたごだど。

でも、あんまり身分がちがうて言うなで、まわりがらあれこれ言わつて宿さがりなただ。二度と都さ上てくるんでなえぞで、固く言い聞かさつて、公卿さまの留守見計らて帰さつたど。おっかなえ御供の衆に見守らつてださげ、どうにもなんなえ。泣ぐ泣ぐふる里さ帰て来たべ。

後で公卿さまもほの事わがて、娘ばとり戻すべど、この山里ば聞き聞き採して来たけど。でも家来達に後追^{ほか}けらつて、もう少しで言うどご、追^{かつ}つで引き止めらったけど。

一目でええさげて、娘さ会わせで呉^かろて言うけつけどもな。会えば未練残すばりだどて、無情にも会わせなえなだけど。

ほんでや、仕方なえさげて、せめで娘の暮^むしてる集落^{むら}だけでも、のぞける所^どさ登らせで呉^かろてだど。いどしい話でなえが。見晴しのきぐ丘^{かみ}がら、もしや恋しい娘の姿でもとらえらつたらと、願^{かね}いこめだどごだべ。

一方、娘^{かたつば}こととしては何も知らないで、田圃^{とむで}さ出て働^{はたら}いたら、何だか芳^{かほ}い香^{かほ}りただよてくつちよん。これや都の匂^{にお}いだ、ただの一時だて忘^{わす}れたごどのなえ、あの方の香^{かほ}りにちげえなえ、てだど。微風^{かぜ}が運^{はこ}んでくる匂^{にお}いの方^{かた}ちや独^{ひとり}りで足向^{あしむか}ぐみでえだけど。

近くの高台^{たかい}さ登^{のぼ}てみだれば、何だか遠^{とほ}くの方^{かた}で「ホーイ、ホーイ」て叫^{こゑ}ぶよだけど。風のせいだが、耳^{みみ}のせいだな、だんだんにや自分の名^な前^{まえ}を呼^よんでいるよ

にも聞けつけど。でもすぐそこまで恋しい公卿さまお越しなってるなんて考えられもしながったべし、例えそうどしても、まわりが氣使て想いを遂げらへでくれるはずもながったろ。

ほれがらしゆもの、娘こ何がさ憑^{つか}れだみでえに、来る日も来る日も、ほの、ながねさ上つてや、都の方向ば眺めで、泣ぎくづつでだけど。やがてにや、とうど、わずらてしまて、命ば縮めでしまたごだど。

きつと、ほの娘の化身^{なりがわり}だんだな。このながねさ茸^{きのこ}の出るよなたなな。ほの茸じゆあ、真黒で、見場は悪くてや・つ・ち・や・な・え・よ・だ・ど・も、香りの上品なごとは天下一品、しかもこの茸、よく香りの通じ合うよな、な・が・ね、な・が・ね・さ・出・つ・と・ご・だ・ど。それもまるで熊^{くまのしし}でも寝ったがど思われつが、大ききでも、こころでや一番だべ。

とにかく、在郷の娘こみでえで、見たどこ悪いども、香りの高いどこは公卿さまていうごだべぢやな。

どんぺからんこ なえけど。

15

蕨わらびに恩ある蛇の先祖

昔あつたけど。春あきて、雪崩なでつき傾斜ひらなど雪消え早く、もう野火つけするばりになたけど。

蛇も土ン中がら這い出して来て、「ああ春だ、良え氣持だ」て、うがれでだど。枯草の上さドサツと長ぐなて日向ぼっこしたどこだど。

冬眠が長がつたさげて、久しぶりてみるお天道さまが、まぶしがつたべちや。すっかり氣持良ぐなてきて、独りでコックリねぶかげ出てくつけど。傍ば蟻こ這て行ごうが、耳もとば蜂あブンブン飛ぼうが、かまたもんでなえ。たとえ体さ触るものあてて感づがなえがつたべ。いつかのこめえ、すっかり眠りこげでしまたけど。

ほのうち、土の下がら千萱ちがやの芽が出はてきてな、蛇の体ばだんだん上の方ちや持上げでるうちに、尖った芽の先っぽが胸腹ぶどば打通してしまたけど。大変なごどえなたども、蛇ごとしては氣付がなえで眠り続けたふうだちやや。やっと目が

さめだ時にはもう遅えんだ。すっかり新し千萱に串刺しなただけど。

ほれ外そうとすっけんども、動げば、刺さた千萱ば心棒にして、ぐるぐる体が廻るばり、ながなが抜けなえで困り果でだけど。誰が来て助けて呉んなえがな。ちよつとでええさげ、手かしてもらいだいと思うども、蛇が相手じゃ誰も気味わるがて寄りつこうともしなえけど。ほしたら、ちようどそばの土から、もこつと頭このぞかへで、蕨が声かげて呉ったけど。

「おれあそんま工面貸してやつさげ、あわてなえで静がにして待ってろ」

てだど。「少し時間かがても、さわがなえで、じつとしてろよ」て、念おすじよんども、ただじつとしてるじゆあ、心細い話だ。たのぼそなじが早く助けて呉んなえが、このままだと死んでしまうばりだてわめぐなだけど。

「待で待で、泣だて、叫だて、いまさはどうなるばや。黙って人の言うごどきいで我慢してろ、時のたつな待つこんだ」て、蛇どごなだめで力つけてくれんなだけど。ほしてるうち、だんだん下がら蕨おがて、鎌首持上げてくる。こ半日も経ったか、とうとう蛇の胴体ば千萱からすっぽり外してくったけど。蕨のおがりかだ

が千萱ば追越したんだ。これで蛇もやつと命ば拾たというもんだ。

蛇ごどしては、何事^{なにじ}あたたて、この蕨の恩ば忘れらんえてだど。今でも蕨さ手向^{てむけ}するよな真似はほつてもしなえなだど。んださげて蛇ば嫌えだていう人いだら、まず蕨一本手折つて、ほれば頭髮さかんざしにさすか、帯さでもはさでもええさげ、体さついで山さ入つと、蛇などほつても、おっかなぐなえど。

へ 長虫や長虫 千萱峠のかぎ蕨の恩ば忘れんな

この呪文、三度唱えつど、蝮^{くそび}だて、まっと毒のうげえ（多い）からす蛇だて、何た蛇だておっかなぐなえ。向うがら逃げて姿消すていうたもんだ。

どんぺからんこ なえけど。

16 田螺の口説

昔あつたけど。或時^{あつづき}な、湿田^{やっこだ}さ棲^つでだ田螺^ぶ、まだ古稻株^{こいね}さたぐついで（しがみ

ついで、日向ぼっこしただけ。

ほごさ、蜻蛉あげこ、水呑み飛んできて、

「天気よくて良えあんばえだ。こげた時に山さでも遊び行てみだら、なんぼか氣持良えんだが」

て、田螺どご誘てみんなだけど。田螺ごとしては、この湿田から一足も他所さなど出はたごどない。連れで行て呉れっさえすれば、どさだて行きだえな山々だどもよ、鴉カラスていう黒鳥がおつかなくてな。見つかつと、どこだもええ、堅いくちばしでジャギモギ突つき破られ、あげくに食くつてしまうもんな。んださげて、鴉の脚の丈の立だなえどこにど思てさ。いつも泥んこなで、こげた湿田にぼりいんなよ、ていうなだけど。

へ 田螺どの 田螺どの 山さあべ

山さ行げばな

鴉という馬鹿鳥が

オッ転ばしたり 突ッついたり

雨あ降つじゆど

その傷　ジックモックド　病やみ申します

てだけど。

「んでや田螺さんの、天が下で一番おつかないものじゆあ、黒鳥が」て、きいでみだど。ほしたら「んだなや」て、少し考えつたけつけや、「ほれより、日頃にがにが苦々しくてなんなえごと一つある」て言うけど。

ほれじゆもの、人間が田螺いどこ卑いめで、「田螺ひろい」て言うて取て行えぐごだど。

「おらだ、何も好き好んで、田や沼さ落ちでんな、んなえ。棲んでんなださげな。鴉なんかどちがて、人さまになら命捧げても良えなだども、決して落ちこぼれなのんなえさげて。どうが田螺拾いてば言てもらいだくなえなよ。拾うなでなくて、勝手に捕つて行ぐなださげて、これがらは山菜あもの採り、雑魚ざつこ獲りみでえに、田螺取りて言てもらいだえもんだでやな」

おひなさまさ供あげんべどて、手桶えさ入つて泥吐がへつた田螺もまだ、ほげ口説

くけど。

どんべからんこ　なえけど。

17

蚯蚓みみずの泣なぎきいいど

昔あつたけど。百姓だ達も八朔来つど、もう昼休もなぐなて、夜仕事しなぐなる。

「秋縄百束」てな、秋始末さ使う縄ない始まるでやは。ほして夜仕事してつと、
はどまえ

半戸前の縁の下だの、雨だれ石の間こあたりから虫こ鳴ぐ。それ聞くじゅど、そ
んま雪来つかど思て気あ氣んなぐなるでやは。

ほげだ時づきだんだな、蟻だせわこ達忙しなぐ稼ぎまわんな見がげんな。土ん中の蚯蚓ま
だほれ見で、「何なえだ、どこだべ、何が起きだべが」て、おどろいでたずねっけど。
ほしたら、

「いよいよ寒くなて来たなで、冬越しの仕度さかかったなで、ここんどこ、どう

もお天気定まらなえなで、仕事はがえがなくてよ。まだ降て来そなたなで、一所懸命なて運でつとごだでや」つけど。

蟻こ達ばりでなえ、地上おもででや、誰もかれも皆、冬場の食物のことでもちきりだけど。蚯蚓もこのさわぎさ、まきこまれそうなて、自分わ身さつまさつて心配あじこなて来てあつたべ。

「やがでにや、おれ達だもなじなるもんだがなや。ここえある土食い上げだら、後はどさ行て食たら良えべじゆ。明日食う土のごど心配で、眠らんなぐなた」つけど。ほう言て、蚯蚓は土ン中で、淋しい声で泣いでつけど。

おがしいんなえが、この広い世の中さ、蚯蚓食うくらえの土もなぐなるなて、なや。ほれでつまらなえ事ばくよくよして心配しんなば、蚯蚓の心配あじこていうなだど。

どんぺからんこ なえけど。

軒下で淋しく鳴ぐ虫の主はオケラだが、昔は蚯蚓でないかと、こんな昔話も語られた。

18 裕福と貧乏の見分け

昔あつたけど。或時あつときな、童達わらしださ一枚ずつ紙あずげで、ここさ裕福な家ど貧乏家ど二軒並べで描いでみろて、題出したけど。お前達だど、何たな絵ば描ぐがな。

何や、大きい家どめめちやここい（小さい）家どが。ほうしたらばなんぼ大きたてボロ家だてあんべした。家あめちやこえたて、財産たんと持つてる家だてあんべよ。他にも馬この居だ家ど居なえ家どが。門構えのりっぱな家ど、屋根のぶぶじよごつた（こわれた）家どが並べて描いだなや、いろいろ出てきたけど。

中で誰れ見でも上手に描げたてうなづげんなはは、ほれあまだ屋根さ南瓜のツル這はわせで、実ばならへった家ど、隣つばまだ燕あ軒さ巢ぐ営つてつどこ描いだなだけど。何でもこれが一等だて誉めらつたふうだ。南瓜あ貧乏で、燕あ金持じゅわけだな。

第一、貧乏人しかたなふひとは他所よげえ持てなえばりか、南瓜の柵かげる長木や柴もなえさじかげて、屋根さ直じかに這はわせる。草屋根くつや傷むこと判りきつてんなだども、どうせこう

せださけて言うなで、構わなえでおぐどごだべ。屋根這^はたなりもの食うど、中風になつからて食うもんでなえ、昔からそう戒めだもんだども、貧乏人にや背に腹かえらんえどごだべちや。

片^か一^だ方^っ、燕まだ裕福な家ば選んで巢^ね営^{えい}むどごだど。毎年同じ巢^ねば修^{しゆ}理^りして営^くむさげ、ボロ家や股^{また}木^た小屋^{こや}でや、もともと頼りなくて駄目ど見るわけだ。ちゃんと先^まば読^よんでかがつとこだんだ。

ほれさ、燕巢^ね営^{えい}んだ家は火事にあわなえても言うしな。ありがたえ鳥こだもんだ。まだ燕が早ぐ渡て来る年は豊作だじゅごんで、初渡来^{はつと}ば、高窓^{さま}さ御^お神^か米^け供^あげて迎えるもんだ。やつぱし燕が巢^ね営^{えい}んだ家は裕福だじゅごだなんべちやな。

お前達、燕見^みがげで追たり、石でからんだりしちや駄目だぞ。大事しなえど裕福にはなれなえな。

どんぺからんこ なえけど。

ばばさの 炉辺むがし

(二) 年中行事のむがし

年中行事は、一年の暮しにつけた節目である。

これがあるから、生活に楽しさが湧き、は・りも出てくる。

それを素通りさせまいと、

行事の約束ごとやしきたりを、

楽しい昔話にして語りついだ。

.....

これは、ばばさ達の領分だった。

1 正月の作試し

昔あつたけど。もう師走の声きくど、何がど忙へしなぐなる。十三日には正月事始めどて、早え家では煤掃いして、新しい蓆を敷き替えたり、正月用の白い米もこの日に搗いだもんだ。歳末つめも一そう迫て、二十五日には納豆も寝へなんなえ、大正月の餅も二十九日はさけて搗く。そうなつと、男人達て女子人達て大忙しだ。

へ 正月アどこまで キリキリ山のかんげまで…。

正月さま、そんまごさんだぞは。

その年神さまじゆなな、日に一升飯あがるお方だそうで、自分わあ、食扶持ぶちとして一斗のお米ば背負てござんなだど。へ正月アござた、何さのつてござた、ゆづり葉さのつて、ゆんづりゆんづりござた…てな。

はるばる出雲を立つて、家々さお着きなさんのは年越の晩だど。ほして卯の日までいでくださるそうだ。卯の日が遅ぐ来ても早ぐ来ても、ななつても卯の日にはお帰りなんだど。その間、もし神さまの滞在十日以内だったら、背負てござた

米で間に合う見込みだともな。ひよっとしてほれ越すよだと、食い込みたてる計算なんべ。

そこでだ、卯の日早く来てくれで、神さまのお米たんと残るようだど、今年は上作だて言うし、一方、食いごみたてるようだど、悪^{わる}ごどに作は悪いどしたもんだ。この占い、早え話が、正月の卯の日早く来る年上作で、遅いど不作だていうごど。

しよでんから(昔から)「若勢^{わかし}たのむなら、正月の作^し試^しみでがらにしろ」てな。上作と出たら言うごどなえども、不作と出たら若勢雇うなば控えんだ。——なえでも暮しはつめだがええてだろ。この試し、あだつか外れつか気つけでみだら……。どんべからんこ なえけど。

2 吹雪の中の田植

しょっでん（昔）にや、百姓してる家では小正月十五日に、雪原ほでやらば田圃ともでにみたて田植さつぎのまねこして上作祈たもんだ。

あぎの方（恵方）ちや地所ば決めでな、先ず四隅けつりかけさ削片けつりかけさしこむ。注連張たと同じこと。その内側さ稲藁いねわらば苗になぞて植えつとこするでや。

まず上手たうさ櫛くしの木ば五本さす。櫛くしの木も米俵こめはらもタラで、俵はみのりのしるしでめでたい。そして木という字を五つ並べたら何になる。三つに二つ組まへつど、森と林になんべ、森林だ。

次、まだ葭よしさして、これは芦原だ。森林で地底ちぞさ溜した水、まだ芦原すずけさ泉気すずけたつて湧き出してくる。ほしたらその水利つ用かて田を耕すていう段取りで、いよいよ稲藁いねわらを十二じふに所じこさす。終えたら大豆まめ殻がらも植える。これは陸作りくさくだ。ほごで、煤掃すすはらいきさ使た藁わら梵ぼん天てんばそばさ立て、ほしてお灯明あきあげ、お神酒かみさけ注ついで豊作祈るもんだ。

この雪中田植さ手かけるなは、そこの家の鋤頭すくもなる人で、ほれさこなえぶち（早

苗配り)どて、男童どこも手伝てつでさせる。こうして明げで一番鳴ぐが鳴かなえがに、童達、まだ鳥追いに廻て来るでや。家毎に鳥追い唄うたて、餅なのもらて行たもんだ。

もしか高窓さまさ駄賃上がてながったりすと、お玉投げじよんで、雪玉にぎつて家やン中さ放り投げでよこす。へ嬢はがあ羽交かぶて、起ぎで鳥追ばえなえ、追えなえ——どて、徒坊達きかなし悪態つく者なもいだもんだだけ。

十六日にや若衆達も家毎やごめ田植踊り舞つてご祝儀もらて、宿で祭りするし、遠く他所よそ村からも田植踊りの門付けも来たもんだ。とにかく、正月にや百姓の祝事たんとあつて、童達も若達もそれぞれ役割ついで楽しがったろよ。

雪中田植て言えば、田植吹雪さつきふぶきどて、この日にはななつてもも(きつと)吹雪つぐどしたもんだともな。ががつてしなええ…。

どんぺからんこ なえけど。

3 お日待に語る凶作話

昔あったけど。初午はつんまの日に女子衆おひまぢばかりのおひまぢあたもんだ。谷地部落など三百年あまり、今なてもその習いばつづけでるじゅごんだ。

この日に契約の主婦か達が鎮守さまさ詣った後、まわり宿きめて籠る。そして凶作話どか、火事話、それにオホソ（天然痘）話と三つを話題にして語り合うなが、昔からの習いだど。

けがちば語るとなつと、なに言ゆたて天明の飢饉が一番ひどえべ。この辺だて、どさ行つても袋担ぎぎ（飯米借り）もならなえどごろが、八升の粃ぬ殻が三合になるまで石臼で挽いで腹たの足しにしたもんだていうし、自在かぎのはな鉤な溜なた煤まではただで、煎じて飲んだじゅごんだ。道端さビッキ草（オオバコ）など一本もなぐなたつけさげ、食える草なら採て食いつくしてしまたんだろな。

或所あつどさ、ごつごつつぐ婆さま居でだど。米粒三粒見つけで、誰おへちやも教おなえで、裁縫ばろこ箱ばこさひそまへでおいだけど。あまり大事にしまい過ぎで、見めなぐしたじよんは。

困^{ひと}たども他人にはきがんなえご^とだし、何もかがわりもなえ嫁^{あね}こさなの、あたり
ちらしてんなだけど。

嫁こは、ろくなものも食へらんえで、毎日牛や馬みでえに酷^こぎ使われでんべ。
家さ居ればいびられんべし、生^なぎだへづら（甲斐）もながつたる。夜上りして来つ
時にや、いつも身も心も疲れ切つては、ドツコイシヨど、どんぎ（上り台）あが
る元氣さえなくなつけど。ほれさ、賀^がだて婆さまどごおつかなくて、ちつとも同情^{なさが}
もかけでくれるでなし、誰一人力なてくれる者てなえ。ただ嫁^{あね}こは自分部屋さ箆^{こも}で、
むがさて（嫁入り）きた時、里からもらてきた櫃^こさ手突込んでみつ時が何よりの
天国だけど。

ほうやつと、なしてだが千貫の重石背負さつたよな疲れも、さつぱりと除^とつで、
頬^ほ面^づさ血の氣もどるよな氣すんなだけど。

或^{あつ}時^きな、姑婆、これ見つけで根性こ曲げてしまてはな、何か櫃^こン中さ隠してる
にちげえなえ、食物しのばせで隠し食いしてんねがて、疑^うぐるどころだろ。そう
なつたらもう婆さまも地獄の餓鬼ど同じごど。嫁こが稼^{かせ}ぎに出た留守見計らつて、

櫃開げだごだど。

なんぼひつくり返したて、婆のおもていた米粒など出はりつこなえし、んめえものなの何一つ出で来なえ。でも田の神さまさ供^あげる稲^{いな}柱^か聯^ずほどの稲穂の小束がみつかたけど。

きつとのごんで、これだったんだ。たしかにこれだ。これ一粒一粒むして噛んだものにちげえなえ。他^あの人達は飢えようが何しようが構わなえていう根性骨が、やらしくなえ（にくらしい）てだど。嫁^{あね}こには無断^{だまつ}で、その稲穂ば盗り出して、婆さまひとりで食うてしまたんだな。全くあぎれはでた婆^ば々^ば腐^く奴^{れめ}だ。

嫁こがむがさつて来つ時、里の親達からくれぐれも言わつて来たなだど。

「けがち・続きの苦しい生活の中から、お前^{まへ}んどこ呉^くれでやんなださげて、櫃^えさ入つて持だへる衣裳だて少しだ。その代り、いざという時の種^こ粃^めど思^{おも}て大事にしたた稲穂ば分けて入つてやる。これはどげた事あてもな、粗末にすんじゃないぞ。向うの人達さも黙^{もく}てでいいさげ、よくよく凶作で、こんだ蒔^まく種^こ粃^めも穫^とれなえていう、そんな時にこれ出せば倍も喜^{よろこ}ごでもらえんだ」て、あずけらつてきたなだった

ど。

たとえ、これっぽちの稲穂でも、これ種子にして、だんだん殖して行けば、いつが、で・つ・ち・り・米の食える年も来んだろ。ほ・さ・望みつないで諦めないうで支えにして来たなだけど。ほれが一粒残さず消えたとあつては、もう誰のせいも聞きただす必要もなかつたべし、まだその意地もなぐなてあつたべ。

張り詰めだ綱がポツンと切つたも同じこと。もう生じる気力もなぐしてしまつたべな。櫃の前さ、精魂^{たまへ}あげだようにガックリうずくまて動けなくなつたけどは。ほれがらじゆもの、日に日に衰弱^がて行^おぐばかりで、あわれ嫁こは花も咲がせずじまいで一生終えでしまつたけど。

どんべからんこ なえけど。

4 狐とお稲荷さま

昔あったけど。大国主命さま、お若えころに、唐の国から天竺かげで修行に行がしやったことあつど。そんな時、天竺で米ていうもの初めて召上てな、こげだうまいもの食たことながった。なんとか日本さ種子ば持ち帰つて育てだえもんだと思われだど。

困ったことには、他所の国さの持出し厳しくて、なんぼ願つてあつたども、なんじもなんなえけど。悪り事だども、こつそり持ち出すより道あるめえ、ほれにや、人間よりも獣の力借りる方が目立たなくてええじゆなで、狐さ話持ちこんで手伝てもらう事したけど。

ほれも運わるぐ感づがつてしまたど。狐あへえほで（大変に）追立られ、とうどたげたたなぐなて（やり切れず）、一時手放すごどしたど。ほれでも追手のすきねらて、くわえてきた稲穂ば大急ぎで穴掘て隠したべ。後でかくし場所わがらなくなつといげないて言うわけで、目じるしに葎一本折つて来て、ほささしておい

だどごだど。

さあ、これで大丈夫というので、狐あずる賢くわざと追手の前さ姿さらして、とんだりねだりして、おれは何もわるいことなどしてなえちゅどご見へだろ。追手もうまぐ騙だまぐかさつて、後追うなあぎらめだけど。

ほとぼりさましてがら、隠し場所さ行てみつと、誰にも発見みつけらんないでちゃんとおったど。掘起して、無事、大国主さまさ手渡したなで、やがて日本さ渡すごども出来たわけだ。今日ぢや、日本国中で稲作て米の飯も食えるようなたじゆんだ。ほん時の手柄で、狐あお稲荷さまのおそばで、別当として仕える身分なただど。

今、種おろしすつ時、苗代のまんなかさ葭一本突立てんべや。あれは狐あ天竺で稲の穂たがたな発わ覚て、追ほっぱらわつて、かぐした時の目印にした由来がら、ああすんなでな。きつとお田の神も天から降りられるとき、種おろした苗代の目当にもなさつてんだてよ。

どんぺからんこ なえけど。

5 お田の神さまの餅

昔あつたけど。二月十六日にはな、冬うち護^{くた}て下^{くだ}さてた山の神さまと交代に、今度お田の神さま出雲から見えられんなだど。どうしても長旅おえなさんなださげ、お着きは晩方なる。夜ンま、餅搗いでお迎えすつとこだ。汚^{よじ}んなえな良えなだどで、何も付けない搗きたての白い餅は一升枡にさらつと盛^たつて神^{だいじんぐさま}棚^{だいら}さ供^くるでや。

田の神さま、せつかく遠い所お越しなても、一服なさる暇もなえくらえだは。百姓達も堆肥運びはソリださげ、雪のあるうちさ^なんなえべし、んだがど思うど、残^{のこ}た雪ば割^わつてまでも種おろしさががらんなえ。それさ春農がら苗^こびらき、田植^うど農仕事追^おつかけてくる。田の神さま、それば見^ま守^ぶて呉^くんねんねなで大忙^{だいばう}しだ。一息つくひまさえなえんだべ。

九月二十九日には、いよいよ刈り上げで、後は秋入れすませば、百姓達は山仕事さ移る。そこでお田の神さまも十月十六日には山の神さまと交代なさて、出雲

さ立つて行かれるという順序だ。

その時は朝立ちなさつから、出立餅でたちもちでお送り申すぞごだ。朝ま早く餅搗いで振舞て上げつちゆんだな。長い道中で、腹空かさなえようにど、お出でなた時と違て、一升枴さ、隙間なくでつしり餅盛て供あげるもんだ。箸使て餅ば枴のすまこまで押しこんで一杯にしてな。

何しろ長えごど、ご苦労かけだおんな。やがて雪も来んだろが、それが消えかがる時分にやまだ来て頂いただぐごどなる。それまでの、しばしのお別れだ。どうが餅たんと召上て行て下さいよーて、お田の神さまば送んなだど。

餅の他にも、おかげさまで、こんげ立派なお米が穫れたて言うなで、稲柱いなかず聯もこさえて土産にしてもらうなだど。糯ど粳と別々に二連にしてな。これ、神棚さ供えでおいで、小正月の梨団子こさえる時に、ほの稲柱聯のもどのみみこさ、一にぎりの餅くつつける。

お田の神を迎える二月十六日の朝餅には、こっからしるしだけでも穂を抜いで、少しばり混ぜで搗き、また種下ろしの時も種籾さ混ぜで上作祈るもんだ。

お田の神さまには、おかげで作ば良ぐしてもらたなで、何がと持だせつとこだろう。

どんぺからんこ なえけどよ。

6 山神さまのお花遊び

昔あつたけど。三月三日で言えば、女子童達はおひなさま飾りだし、男童達も山の神さまのお花遊びどて、どこも子供祭りたてたもんだ。

へ 山の神の宝楽 一升たも給れ勸進

ながねに祀てある部落むらの山の神さまを迎えて来て、家毎やいめ勸進してまわる。銭上げでもらつたり、米もらたり、節句でもあつさげて、鯨餅くじらもち、えんがら饅頭しょうまなど、んめえものもたんともらうんだ。その晩に宿でいただき物で大好きな「色付御飯しやうふま」を炊いでもらつて、子ども達ばりで振舞しつとこだてや。十五なる男の子が一番

の頭になって大将、後は年の順に副将、三将と家来ばきめる。もらいものの分配も、みな童達まがせ、ちゃんといさかいもなくやるもんだでや。

何時の年だったかな、悪童達の、んとそろた年だったんだ。三本杉のながねさ祀てる山の神さま迎えでくつ時、ご神体ばソリ代りにして馬のりなでだけど。ホーホーで、ひらば滑り下りて来つけど。毎年奉納する小さえ木偶ばかつくなめんどう、だとして、数珠つなぎに、ゆっくらげで雪の上引き摺ってくる。堰端さ来たら、今度はイカダ流しで水漬けだけど。

大家の年寄り、まだそれ見つけで、罰かぶるごとやめろどて、しこだまごさえだ風だちや。でも童達、肯しながったど。

へ 山の神の勧進 にんぎり地ン蔵参った参った

祝て給れ

山の神の勧進 米一升十二文

集落さ下て、家毎に勧進してまわたべ。ほして、さきだごしやがった爺さまの家さも行たべちや。

誰か、爺さまちや、へ給れ給れ、今一升給れ——どて、ま・と・催・促・た・ないだけど。
ほしつと、爺さま、米一升なて言わなえで、担げるごんたら一俵まんま呉れるて、
稲庭に積んだ四斗入指さして、からがたどこだど。体も小さえなで、まさかと思
て卑め^やだらう。「本当が」て、念押したと思つたら、みごどえ担がつたじょん。こ
ん時あ爺さま、手すつてあやまたつけな。

こげだごとあた翌年だけがな、いつもの神下しん時だ。山の神さま出はてきて、
ほん時の言ばすかすかと語てな。まずおどろいだんねが。誰もおな・か・ば・（巫女）
さつげ口した者もあんめえに、山の神さま、またな・も・な・も・覚えつた口振りだけど。
お花見にや祠から出はて、童達と一緒に遊ぶのば何よりの息抜きにしてる。
なんたいたずらなどさつても、うれしいなださげ、どげた事したて、ほ・つ・て・も・叱
らなえでもらいだえ。どうか、この日だけは童達と存分遊ばせでもらいだえ。て
だど。ちゃんと、以前^{しよせん}のごど分がてて言うさげ、本当に、動・転・さ・せ・ら・つ・た。

あん時の童達^なが：みなたぐましくなて、兵隊にとられ、戦・争・さ・行・て、て・い・し・た・
手柄たでだ者^なもいだでや。

どんぺからんこ　なえけど。

7　花　折　り　祭

昔あつたけど。ながねのてっぺんの一番見晴らしの良え所さ、裾の村々で一緒に祭てる神さまあるもんだ。太平山どて、四月の九日がそこのお祭りだ。

祭りには一釜餅どてな、糯米ふかして搗いで、そのまんま山さ運で、太平山さ供げて祝う。ほしてな、山さ咲いでるきれいな花こば手折て、家さ迎えて来るもんだ。

この遊山は若夫婦達が、おぼこ連れでお参り行く祭りだとも、四月十七日にや、運開ぎどてな、今度は年寄りだの祭りで、あまりきつぐなえ、近間の見晴らしの丘さ行て遊山すんだ。若しかそれが無理な大年寄りだとしつど、往還の十字路か、合道なつてつ所さ、ゴザでも敷いで呉つて重箱開きさへつちゆんだな。

道の開げんなが、運の開げるしるしていう意味なんだべな。道行く人達、馬方なまひきなり、童達なり、誰かれなく声かけてもらって喜んだもんだろ。長えごど雪の中の暮しだったさげ、花こなど見だら、かくべつな気分わいだもんだろよ。

花たつてな、本当は何でも良えじもんではなえ。春一番にさがけて咲くは「万作」だ。雪の下からでも咲いで出るというがら、これ見つど、いよいよ春あ来たなていう気なるし、万よろずの作良しで、この花こごつて咲いてる年は豊作としたもんだ。また辛夷こぶしも縁起良え花でな、天くらふいで（上向きに）咲く年は上作、うたがいなしていう花だ。

山吹の花はきれいだども、家さ採てきては駄目。この花ば馬に見せだら、おんごどすつとて叱られる。馬に黄金の因縁からか、まだは山吹にや実がならないていう縁起からかな。ガザキもお蚕こさま嫌うどて、屋敷きらン中さ生えるなも嫌たもんだ。

ほさ来つど、喜ばれんなは藤の花だ。お蚕さま置く家でなの、藤の花咲くころなつと、わぎに山さ行ても、蚕棚さかざるもんだ。お蚕さま藤色になつど上作だ

て言うて。まだ「藤の花には虫喰いなし」どて、花房が元から先まで、ぞくつと揃て咲くなで、ほれさならて、お蚕さまもムラが出ないようにてな。早すぎつとも、馬鈴薯掘つて、いっしょに「養蚕神」さ供げるでや。とにかく、藤の花みでえに揃て咲く花も珍しいな。：花迎えの唄、おべったが。

へ 次郎ンこ 太郎ンこ 花折り行がねが

何花折りや きごの花折りよ

一本折つてや ひつ担ぎ 二本折つてや ひつ担ぎ

三本目にや日暮れで 茅野さ泊つて

朝間早く起きでみだれば 月のような娘子が

足駄はいで杖ついで 黄金の銚子で酒注いで

爺も一杯 いやいや 婆も一杯 いやいや

いやいやの薬師詣りに行ぐどて 犬にワンと吠えられて

とつて返してみだれば 竹の節見つけた

ガックリ割つてみだれば 赤い鳥十二 白い鳥十二

十二の中に 三才なる駒こは

あつちや向いても チヨツチヨツチヨ

こつちや向いても チヨツチヨツチヨ

チヨツチヨツチヨの流行る時ア

飢饉ア流れろ 流れろ

福アこつちさ止め 止め

8 飯食わなえ嫁

昔あつたけど。ひとり暮しの若え者いてな、どげた良え仲人話きても、嫁もら
えば食う口もふえつちゆなで、どうしても首肯かんづかながつたけど。

或時あつとき、この男どさ、ぶりの良え女子かげこんで来たけど。

「なんとか、わたしんどこ、嫁にして呉んなえが、飯ままなど一食ひとがたけだて食なえたてえ

えさげ」

てだど。男はほの一言氣に入つて、家さ入れるごとしたけど。

飯食なえで働くじゅあ、しみつたれ男にはこでえらんなえ話だ。ところが、日柄経つてみつと、どうもひとりで暮しつた時にくらべて、米ひとつの底見えな早え氣しる。これはおかしいぞていうなで、何が氣つけたと。

或日、男あいつも同じように山さ稼ぎ行ぐふりして、こつそり梁はりの上さあがて息殺して様子のぞこんでいたど。嫁あね、まだてつきり兄は山さ行たものどばり思てたべ。滅多に使わなえ味噌豆煮る大鍋ばひっぱり出してきて、ほれで飯炊ぎ出したどごだど。

おれ一人分さ、こんげにえつぺえ炊いで、一体なじよしつとこだ。さではやつぱり隠つで良くなえごどしつたな。目ば皿ひらこにして見たじよん。

そのうち、飯も炊けだべ。水屋さ鍋おろして行てだど。まず、頭の髪さ櫛くしかけだと思たば、頭の頂てうさ、ざっくり大きい口開いだけど。立膝やきめしついで、握飯やきめしにぎるはしながら、その口めがけて、ストンストンと放り込むなだけど。

男まだ天井でこれ見でおどろいたの何ので、さあ大変、人間だどばり思て連れそてきたのに、とんでもなえ化物だ、ていうなで、梁から転げ落ちるよにして下りて逃げだどごだど。嫁あねこもそさ氣付いで、もしこのごど判てしまえば、人間どもの仕返しこわえ。どうしてもこの男ばつかまえねばていうなで、もう化物の本性出して、「こらつ待て、ほつても逃がさねぞ」て、しゃにむに追おつかけつけど。

男あちこちつまずいて、横転よこころひび、崖たがみから落ちそうなつと、傍さ生えつた草だべ、茨だべ、たぐたぐついで逃げ逃げ、ほうほうの態で逃げだけど。でも、どうしてもたげたたなぐなぐなて（万策つき）、窪地さ、しゃがまて息殺いきころしたどごだど。そご追いつかつて見つかてしまたべ。もうこれあ、ひと呑みされんだがど観念したども、何だかおかしい。相手が手が届きそうでも、いま一足で近寄れなえ。

お前、手さ持た物ば投げで、ほごから出はて来いていうど、見つど、手さ握つたな菖蒲だけど。逃げつ時、転げ落ちるはずみに、たぐたぐついで手折つたなだろ。自分わあでも氣付かながつたども、剣みだいな葉っぱ放さずどにいたんだな。しゃがんでだ所どさも、匂いのつよい艾あやがえつぺ生えつたつたつけ。とにかく、化物は、ほれらば

苦手で、とてもおっかなくて近寄れなかつたろ。男もほさ氣づいだなで、化物の言うごとほつてもきかなえじよん。とうど、化物もあきらめで、姿は消したけどは。

やがで、もう大丈夫と見で、家さ帰て、戸の口ていう戸の口のぐし^{はえりこめ}さ、菖蒲^{よもぎ}ど艾はさしておいだごだど。これなら、なんぼ化物でも、乱入^{はえりこめ}ながったべちや。ほの日、ちようど五月の節句さあだったけがら、この話聞いた村の人達も、どこでもこの日には菖蒲と艾ば屋根ささすごでしたど。

どんぺからんこ　なえけど。

9　不動さままぶた田螺

昔あつたけど。或所でな、火出してお不動さま祀である御堂も丸焼げなただ。火ば護^{まも}てくれる神さまを焼出すなんて大変なごとしてしまは。なして火ば粗末

したんだか、罰かぶるごとしたもんだでや。ご本尊さまも外さ出しかねたつけが、何も祟りがなければど誰だて思たべ。かけつけて来た人達もそれどわがて、おそるおそる焼跡片づけだど。そしたらば、どうだ。木彫りで出来てるご本尊が、焼芥やけこじの中から傷跡一つつかないで出はてきたどごだど。これにはまず、みなも動転してしまたけど。

一体、どうしたことだべ。神さまのご利益で大したもんだ。安全な所どさ持ち出すどころか、水かける手さえ無がつたというのに、ふしぎな事もあるもんだ。

それというのも、よつくど見つど、なんとゴマンという田螺うぶが、どこの沼や田圃がら集まて来たもんだか、お不動さまの体さ、どこと言わず、ここといわず、一分の隙間もなく吸いっいで、護まもてあげだ模様だけど。このことあてからが、田螺のかっこうしたものとみつけつど、お不動さまさ納めるようなたど。

昔、倉建てつ時、荒壁ぬんなに生田螺三粒つかまえてきて、塗り込んだもんだ。火防ぐ呪文だべな。また春になって、初めて雪どけの田圃がら田螺ひろてくつと、「三粒屋根越してから家さ入れろ」てな、これだて防火の呪だんだ。

篠竹ば二尺ばりに切ったら、先っぽさ割り入れる。ほさ田螺の粒こはさんで、この竹の棒ば、勢いよく振りまわすど、挟んだ田螺が遠くまでふっ飛んで行く。こうしつとなんぼ高え屋根だて越すなは、童達だて楽々造作なえこんだ。こんだから、初田螺、屋根越すな忘んなえでしてみろ。
どんぺからんこ なえけど。

10 仏嫌いの猿

昔ていうたて、どのくらえ昔のことだんだが、古い話で、猿まだ人間だった時のこつだど。ずっとしよつでんは人間が猿だったなでなくて、猿あ人間だったなだど。

或所^{あつど}さ、少し勝手^{ぶんで}な男いでな、今日は彼岸の中日だていうなに、ひとりで山さ遊び行たどこだど。大体どこの家だて、この日は仕事も休んでお寺詣り行ぐどが、

家内中、手分けしても、あちこち仏拝み歩ぐんださげな。ことに「中日に、七所^{どし}から彼岸団子ご馳走になつど、きつと良えごどある」て言たもんだ。それだのに仏さまはそつちのけして、何故^ななごどで山さ行くごどや。

今日あたり山さ行たら、栗なぞ、ひとりで拾い切んなえほど落ちでんべ。ほれ
ばりが、山ぶどう、山なしなども撓^{しな}りがえつ所^{どこ}おべつたさげ、勝負しんべじゆ
で、誰さも声かけなえで抜けがけした風だちや。

ところがなんと勘定だが、栗こ一粒落ちた跡もなえじよん。木ばほろてイガむ
いでみたども、まだえんでなえ。さんざ歩きまわたどもくたびれもうけで、とう
ど暇倒れだけど。

あげぐに帰てみだれば、家の童こ火傷^{やけど}したどて大さわぎしつたどさ来あだて、
ほれやどうすつとええ、何つけつとええ、とかてさわいでる最中だけど。ただこ
の騒ぎは他所^{そこ}にして、高窓^{さま}さ、ねこつと坐て、おそこ笑つて見物してる者いたふ
うだ。見だごとなえ者だ、一体ほれやなえだもんだつたか、ふしぎでならなえ。
彼岸だていうなに、仏さま拝まなえなさ、罰かぶせた仏さまだつたもんか、それ

ども火傷やけどしたおぼこが猿に生れかわつどこだったか。

どっちしても、今は猿まだ仏さまが大嫌いで、両手あわせて拝む振りされつと、
ごしやえで格別べつだんださげ。糞たつでそれつかんで投げでよごすんだか、ししや
ましする。遠廻しでも来たら、からがてみんだ。芸ばそちのけで、牙むいて飛
びかかる勘定しんださげな。

彼岸の中日にや、用あても休みして、後で傭かけでも仏お参りばするもんだて
な。

どんぺからんこ なえけど。

11 ぐみ節句の仕来り

昔あつたけど。九月の月には節句が三度ある。九日ど十九日に二十九日。初め
の九日は菊節句でいって、古からの都の習いばまねで菊の花摘んで酢物にしたり、

合えだり、いろいろ菊のご馳走をこさえ、お汁つけさも花びら浮すやら、風流に菊酒で祝うもんだ。

次の十九日は武士だか、町場で祝う節句かな。でもこの日は百姓達だて河原がらぐみの実を採つて来て、膾なますなんかこさえて祝うでや。ぐみの実さ熱湯かげつと、白いぶつぶつじゅ渋が除れっさげ、とつてもきれいで、うまい料理できるもんだ。

何ていうても、後の二十九日は刈り上げどて、こっちは本番。この日は餅振舞いで一番上等のお祝い。百姓してないどげた家でも餅搗ぐ、「刈り上げの餅は乞食も橋の下で搗ぐ」どてな。

臼やこしき使わないたても、糯米炊いで、ほれ袋さ詰め、堅いもんさ打つからみ打ぶつからみするど、ひとりで餅えなる。とにかく、三日のうちで最後しまいの九の日は百姓達一番ばぎん張はて振舞いするどごだ

とごろで、九まだ苦ていうこんで、それが三つあっさげて、「苦三くみ」だ。ぐみの実の膾やくにして厄を消すという所から、こういう季節のご馳走も考えらったもんだろ。

それど、各九（さく）の日にも畑から茄子もいで来て、茄子の古漬けに入れておく。それを元日になつと出して、厄（やく）払いに、家族みんなに食べさせるていう家がある。桶（ぶく）中で、せつかくの苦三の茄子が、他（ほか）んなまぎれるどわりいどて、三個ずつ組合せ、み（み）げ（げ）て結んで漬けておく。これならほ（ほ）つても間違えつこなえ。苦三（くさん）ばなし（茄子）——ていう縁起で、謎かけでえだども、厄（やく）さえ除（と）れだら、何よりだ。

どんぺからんこ　なえけど。

12　橋の下にいる神さま

昔あつたけど。橋の下には、「賽の神（まが）」ていう神さまいなさてな、集落中（むらなか）さ疫病神など一歩も入らなえよう、いつも護（まが）ていて下さんなだ。

お前達、いたずらこえで、橋の上がら小便なのたんなえべな。ひよつとして、

ほの神さまのお顔さ、しぶきでもひつかがつど大変だぞ。罰かぶて、しんちこ曲んださけな。この神さまは、ホラ、疫病追いや眼わずらいの取払いすつ時、橋のたもどさ藁人形祀てくんべ。あん時の神さまで、道祖神さまという所もあるじゅごんだ。

どこのむがさりでも、ここを通る時にや、わざわざ足とめで「たんぎ唄」あげて行くのがきまりどされる。

へ 小石小川原のザクザク石は 涛に揺れて流れ行く 流れ行く―。

てな。むがさりは他所者のお通りださげ、仁義だどごだろ。この祝い唄で通さしてもらい、またこの集落も益々繁昌するようにと、祝わて行くどごだんだ。ほのぐらえだもの、なして小便なのたつてええもんだがよ。何だて…。

へ 一人二人三平の子、なえどりきんじの糞かき棒、橋の下のめぐされ爺―
だて。とんでもねえ、口あひん曲んだぞ。罰かぶて橋がら落ちて、怪我もしかねえ、ほれより、お前達こげた唄うだわなえがな…。

へ ゆんべおうちよめこ きつくりやのおおふりこ

年もえがずに長吉にもらわれて

長吉もた子は男の子ども

江戸にのぼらせて 学問させて

江戸で一番 新潟で二番 酒田三番 吉原で四番

小石小川原のザクザク石は

涛に揺れて岸に着く 岸に着く

昔、よぐしよんなごつぎして遊だもんだったよ。

どんぺからんこ なえけど。

13 大根・蕪の精進日

昔あったけど。大根と蕪は一日精進さなんなえ日あんど。今だてしてる家ある。

その日は十月十日で、大根の年とりて言て、この夜一晩でおがんのだど。そのお

がる最中ば動転させつと、良ぐなえていうなで、朝ッから畑さ足も踏み入んなえ
ごどしてんな。もちろん精進じゅんだ。きつとの事ごんで、十日夜とおかさまへのお誓いだ
てだんだ。小豆飯も炊いで供あげるでや。

まだ、この日は「馬の渴れ日」どて、秣んまのものなんぼやてもたくさだ（満腹）てい
うごど知らなえ、食せさえすれや何ぼでも食うていう日だど。今まで刈干運びや
稲掛はこびで難儀つづいださげ、扱いよくしておいで、萱刈どきには、まだたん
と稼いでもらわねばなんね。ゆつくり休まへでこ馳走する日だんだ。畑の菜物ば
崇めだり、使い馬ば大事に労いたわる日なんだろ。

それど、十月十五日は、お大日さまのお祭り。この日も大根・蕪の精進だ。昔
な、義経が弁慶だどご従えて、庄内がら弁慶丘越してきた。ほして小国の新輔さ
んの家さ、しばらく足とめたふうだ。そんな時、厄介なたお札にいていうなで、掛軸
一本ど、麻袴一そろえ置いで行がれだどごだど。その軸が今のご本尊だて伝えら
れる。

或時あつぎな、ここの家が火出して、丸焼あつぎげなたことあたど。ふしぎなこともあたも

んだ。義経くれで見た物はどうしてが、そつくり屋外おにやさ出はてだど。大根畑の中で火ば避けつたけど。神さまの力ちゅうもんだべな。ほれがらじゅもの、大根・蕪ば精進して、この宝物ば祀て、お仕えするごどしたど。こういうごどのあつた十月十五日に毎年、ご開帳するども、お詣りする人達も、この日は大根・蕪精進すんなだど。

西川にも同じに大日さま祀てある。こつちの家は小国どは昔姉妹で、義経達が小国訪ねた時に、西川の方さも寄てみろて言わつて世話なたて伝えらつて。でも西川のその家に言わせつど、一行は砥山峠ば越して来たなで、小国より先に着いだなだ。そこで腹ごさえもさせ、ひつわっぱ（櫃ワツパ）えつぺえに飯も握てもだせだ。次の行く先に小国の妹の家も教えで、立たせだなだつたど。ほの礼にどて、箱さ入たりっぱなもの、もらたつたど。

それがやつぱり火事で家が焼けだ時に、庭の梅の木の股またかさ、ひとりではさまて火避げていたけど。さつそぐ箱開けてみだれば、ありがでえ掛軸と、九月十五日に、蕪を精進するよう書いた物出たど。ここ西川では、一と月早い九月十五日に

開帳して、蕪だけ精進で、大根は食てもええじゅごんだ。今もその通りしてつと。
どんぺからんこ なえけど。

14 すずぐれ恵比寿

昔あつたけど。師走五日は「すずぐれ恵比寿」どて、これは百姓の恵比寿祭で言わつてゐる。この日は、幾品なんぼしなも豆料理こさえて、豆づぐしで振舞つげいするもんだ。まず勘定してみつか。大豆を入れて炊いだ豆ご飯だろ。お汁は身は何でもええども、打豆入れて煮で、これで二品。三つ目は三杯酢豆で、祝い事にや欠がさんなえ。ほれさ寄豆腐よせどか、煎豆の油味噌も、いつでも出来る。特別この日に限つてというものどなつと、赤臍とこづき豆こづき豆がな。

黒豆で豆臍にすつと、おろしがひとりで赤ぐ色ついで、とつてもきれいだし、味も佳いもんだ。こづき豆じゅあ、豆腐で出来でるよだども、これは大豆を煎つ

てから挽臼でひいて、ほれさ糯米入れで鉢しン中ねでしとねる。それ握ねって、一ぺん火で焙いいでがら煮るといい。家によつて少しは伝授がちがうなもな。どうだ、もう七種類しなぐらいなつか。略やっさないで、せめでこのぐらいはふんぱつしねばなんねべじゆ。

昔、料理の名人が頭しぼて豆料理考えたど。どうにか四十五品は浮んだども、縁起でなんとか四十七にしたいと思たど。でもどげえ考えても、あど二品だけは浮がで来ながつたてよ。

そしたら、頓智のええ人いで、ほれにや手まめ、足まめ加したら、丁度になんべて言たけど。なるほど、それやええごんだていうなで、この日はまめに夜業する習しいが生つたど。

男人達なら藁仕事、小ちやこい男童でも、小毛縄おなごなう。女子人達は麻糸紡みでも裁縫ぬいでもええ、童達でも雑巾縫たて良いさげ、手に針持なつごと。ほして夜業終えたら、みなで豆腐焼まめきして夜食だ。手まめ、足まめは家内中達者で暮すように――という祈りもあつて、これは何時までも続つけてほしい祭だもんだ。

どんぺからんこ　なえけど。

15　太子講吹雪

昔あつたけど。「貧乏人の子沢山」じゅあ、太子講さまのことがしんなえ。小つちやえおぼこ、ざくざくといで、食事時^{まじき}など忙しなえもんで、普通の箸では養いきんない。ほごで一間もあるよな長ンげえ箸こさえて、おぼご達の口さ運んでくつた方ええどなたど。太子講の日にはどこの家でも長ンげえ箸ば神棚さまさあげんべ。

太子講さまも初めは暮しもしかだながったふうだども、童達大きくなて、手かがらなぐなつと、だんだん溜てきて、後では裕福なてあつたど。そのいわれで、さきの太子講十一月三日には、つましく小豆粥炊いで祝い、中の太子十三日には少しおごて小豆飯^{あづきまき}、ほしてしまい太子二十三日は式の餅（白い餅）搗いて小豆餅

にど、だんだん出世する。

太子講さまは子供おぼこえつぺえ持たて言うなで、きつとお蚕こくえさまの神さまでもあつたんだ。養蚕家こくえおくえでや、うんと信仰厚こくえおくえがつたもんだ。

とごろで、太子講さま貧乏しかたなえ盛りん時だど。或時、日暮方としよなて、年老た旅人としよがたがて、軒隅さびでええさげ、一晚宿かしてくろて頼むけど。見れば吹雪の中を何ぼか難儀して、寒さびがつたんだろ。まるで乾鰯からげみでえに凍らせで、やつと辿りついたみでえだけど。哀れだと思て、その年老としよりば抱くようにして、家としよ中さ入れでな。囲炉裏端から童達ば追立てでおいで、どんどん薪焚たいであでだどこだど。

この様子じゃ、きつとのごで腹も空かしてんだろ。んだども、今いまで差上げる物は何も残て居ないし、米びつは底ついでる。借り行くにも隣は遠いなで困つたもんだ。

待でよ。近ぐにある大家の畑に行つてみたら、穫り残しの大根屑でもないもんだがな、他人の物さ、ことわりなし手かけるじゅあ悪りごどだ。それは重々判つてんなだども、旅人どこ見つとむむぞささえくて、背に腹はかえられなえ。これ一ぺ

んどうか許して下さえよとて、神さまさ詫びる氣持で畑さ行てみだど。

雪ば深くかぶた畑探して、やつと旅人の口しのぐ分だけ、大根みつけて掘て来たど。さつそく煮で、さし上げだべ。外に何もほかご馳走てなえ、大根ばりだども、熱いどこ腹さ入つて、温まらせて勧めだれば、「おかげで生き返つた氣持する。うまいうまい」て、喜んで食うけど。

一晚中、大吹雪吹いで、次の朝あしたまなたれば、太子講さま、畑さ行た足跡など、ぺろつと埋まて、わからなくなてしまたけど。ほれがら太子講の日ていうど、きつと吹雪ついで大荒れなつけど。人はこれば「太子講吹雪」ていうど。

どんべからんこ なえけど。

16 雪隠神さま

昔あつたけど。雪隠神さまどてな、ああ居だども、居だども。雪隠さだてどさ

だて、神さまいなさる。しかも、とっても顔立のめんごげだ神さまだど。

ホラ、年越しの晩方、家内中みんなの分の眼ば、紙さ描くが、糞ミゴで眼鏡みでえな輪こさえだりして、雪隠のそばの板張さ貼りつけんべ。ほさ、こ餅あげ、お灯明ともして拝んでるな氣付かないが。お前の家では、ほだごどしなえが。

この神さまは場所柄に似合わないで、とてもきれいなのが好きだそうだ。よく信心すつと、あかめちよ（コマトラ）などかからないし、流行眼病もとつ払って呉る神さまだど。ほれさ何時も雪隠ばきれいに掃除する人ば良え所さ縁づかせで呉れつちゆし、後でめんごげだおぼこもせ。んと幸せにして呉れつと。んださげて娘こん時から、雪隠掃除を嫌だから、なえでしなんなえもんだぞ。

ところで、勘定しに行て、壺の中さ唾したけばするものでない。糞ばばだて小便だて、どっち転んでもきたない甲乙はないよなもんだもな。唾されつと、神さま余分な仕事ができて、困てしまうなだけど。神さまがいつも糞つぽに構えていられる。上からねぎばて（踏張る）たれられつと、ほれさ手さしのべて受け止めつさげてな。

片手かたひらでは糞ば、もう片手では小便は受けんども、ほごさ唾されつど、こんど受

ける手なぐなて、やむを得なえ口開けて受けねばなんなくなつど。これがら氣つ
けて、神さまさ、余計なめいわくはかげなえこつたな。

どんぺからんこ　なえけど。

第二部 早物語

早物語

早口ことば

ソーレ物語、語り候

瞽女が長い口説節を語るあ・わ・え（合間）に、よく早物語や早口ことばをきかせた。それが伝わり遺つて、酒席をにぎやかにわせる種になったばかりか、夜なべの「寄せ」（共同作業）には語り部が宿々から、引っぱりダコで迎えられたものだという。

人手ばかりに頼った昔のマブシ織りや、秣にする萩の葉扱いなど、作業が単純なだけに、どうしても眠たくなる。そんな時、かるい艶話やこの早おかたり

物語などが何よりの眠気ざましで、働く手を休ませない特効があつた。昔はそんな語り部は部落むらの宝とされたことだろう。

早物語の中には、口説節や変りおいとこ、あるいは手まり唄などに姿を変えて親しまれたものもある。従つて、多少は原形をくずしたものもあるかもしれない。

1 祝い物語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。長者のみじやしり（下水溜）によし三束刈れば千束となり、二束刈れば二千束となり、三束刈れば三千束となる。酒を作れば泉酒、それを呑んだり食ったり、富貴バンボコリと栄えたんの物語。

2 大黒物語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。アギの方（恵方）から大黒さまという神さま、ドツタリ舞い込んだの物語。

一で俵をドンと踏んまえまして、二でニツコと笑うて、三で盃の大きい奴でゴックゴックといただきますように、四つ世の中よいように、五つ泉がお台所からコックコックと湧き出すように、六つ無病息災で、七つ何事も無事災難などこの家にならないように、八つ屋敷の悪魔は隅から隅までめんごけにさっぱりツルリぺろつと払うて、九ツ米倉銭倉など七十五軒も建て並べ、十に、当家のお旦那さま初め、家内ご一同、馬牛猫に至るまで、まめ息災で働きますよう、どっさり祝ったんの物語。

3 地ン蔵物語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。江戸は浅草前のことなれば、奇妙ふしぎな地蔵が一体立たせ給う。

参る堂舎は何処何処。江戸千軒、桂は千軒、大津、坂本、滋賀、唐津まで八万軒まで参らせ候。そのうち十七、八の女郎一人来たらせ給う。その女郎の召したる小袖は唐全、唐綾、柳の織物よ。十二単衣と召されける。地蔵の前に畏り、肝胆口説いてよみにける。

地蔵は持ったる錫杖打ち投げて、女郎の小腰にむつたと組み、チータハータと半時ばかり掛け合った。

あたりの小地蔵じゃれの申すには、おらも早う大地蔵となつて、しんと拝まれない、との戯物語。

4 達磨大師物語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。達磨大師さま、お江戸見物お出なさる。九段の坂を下るとて、オンコロコロリと転び起き、そこで茶屋に腰をかけ、茶屋の団子をつまみ食い、これ達磨、お足頂戴と言えば、達磨にお足はあるものか、と言ったんの物語。

5 瓢箪物語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。鎌倉景勝寺の廊下の隅に瓢箪一匹下りければ、その瓢箪の願ひことは、それ、南蛮が食いたい、山椒が食いたい、あそご、ここのおば様や姉様のふところに、カサリン、コソリン、カサコソリンと、入りたいとの願ひなれば、なんと瓢箪の分際としては桐の液を炙れば、大き

な根を出す、ヒヨヒヨトモトモ、エンポスンポ、エイヒキチャヒキ、一個の茶として小金語り語って候、物語。

6 田螺と鴉の物語

ソーレ物語、語り候。語るはもつての物語。江戸は浅草前のことなれば、奇妙不思議だ町人一人来たらせ給う。田螺このよし未来を願う。

天が下を飛びまわる鴉九郎左エ門に踏みつけられ、そこで田螺^{つぶいち}市は波一重、ゴミ一重ぬるりサットー這みついて申すよう。天が下を飛びまわる鴉九郎左エ門殿、御身はそれ程美しくて、賤しげ者を侮辱^{ぶく}すなや、御身の姿を見てやれば、所化の衣にさも似たり。またおつぶりさまの結構さまと申するのは繻子の頭巾にはさも似たり。コカンコカンとおっしゃる声は鶯の春の巻唱える声にさも似たり。それほど御身は美しくても賤しげ者を侮辱^{ぶく}すなや。飴かでんちゅか砂糖菓子か、くし

くし柿か串柿か、なんどと欺されて、そこで鴉九郎左エ門、今日は親父の命日でもあるうと、雲を遙かに飛び上がる。そこで田螺市は波一重ゴミ一重ぬるりサットー這みつけて申すよう。

それほどわが身が美しいと思うかや、阿呆鳥の馬鹿鴉。からてつ・つ・ぶりなど、めぐさきこと、山に立つたる焼^{やけ}け切株。またコカンコカンとふぬかす声は、道端の蛙、駒に蹴つとばされで、くたばる時の声にさも似たり。また身体^{ごたえ}つきなども十七、八年経つたる金火箸^ぶの打ち折れたるにもさも似たり。そこで鴉九郎左エ門、ドングリごとや酸漿^{ほんづき}ごとの血の涙、どつたりどつたり落して飛んだの物語。

7 逆^{かっちや}ま物語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。一反畑に瓜作り、二反畑に花が咲き、三反畑に大瓜ゴロゴロゴロツとなったの物語。

はんだか ひつと

ところが隣の裸野郎が来て、裸懷でヒットコヒットコにもえで行ったん物語。そこを座頭に見つけられ、唾に声かけられ、手なしにつかめられ、足なしに追われ、棒でしばれちゃ、縄で叩げのて、ジャエホエ、ジャエホエて追わっだん物語。

とごろで、家の前の垣柴を潜るどて、踵の割り筋から後頭部まで、蚯蚓のよう

だ棘をべろつべろべつりと刺した物語。

こらつ臼で掘つても抜けない、杵で掘つても抜けない。そこで岩の牛蒡畑の

雑魚海のふぐだぢ（野菜の収穫し残したものの新芽）焼いで溶いでつけだれば、昨日の今時分ベロベロベツツリと拔げだの物語。ケケーロー。

8 逆ま物語（二）

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。一段畑に瓜作り、二段畑に花咲か

せ、三段畑に大瓜ゴロゴロゴロッとなつたの物語。

昨夜ゆんべ生れた裸半段次郎は挽ひぎもきふところに挽ひぎ、袂ゆへに挽ひいで、座頭に見つけられ、足なしに追われ、手なしに捕められ、やりからまんど突き出されたんの物語。

ところで裏の垣柴をむぐろうとした時に、蚯蚓のような棘をぶんぬぐどから足のつり筋にメロメロメツツリと刺てしたんの物語。

臼で掘つても取れない、手杵てっけで掘つても取れない、だ・おの黒羽根、鴉の白羽根でとつたれば、とうとう除れだんの物語。

9 鉋 物 語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。とんとん三郎さ、鉋一丁貸したんの物語。

二日目に取りえ行たでば、ほんだ鉋借つで来ねえ
三日目に取りえ行たでば、見だごどもなえ鉋借つで来ねえ
四日目に取りえ行たでば、用もなえ鉋借つで来なえ
五日目に取りえ行たでば、何時鉋など借つで来たどご
六日目に取りえ行たでば、無理に鉋など借つだ覚えな
七日目に取りえ行たでば、なんで鉋なて借つで来ろべ
八日目に取りえ行たでば、やつちもなえ鉋借つで来ねえ
九日目に取りえ行たでば、苦情の高え鉋など借つで来んば
十日目に取りえ行たでば、とんでもなえご言て来んな
とうどう、とん三郎に鉋一丁とられだんの物語。

10 ちよいとちよぼこり

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。ちよいとちよぼこり、ちよんなや、いつけあおき、にげあおき、さぎやの、でんでくでんの伝兵衛嬢ア出臍で、お餅をストンと搗いだれば、一膳あがれや、二膳あがれや、一膳二膳は新ソバコロリな、おらのちやこなべ、七十三なつて氣若い婆さん、背中をどつちりたいたんの物語。トロロー。

11 松蔵婆々物語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。音にきこえし松蔵の婆々ちや殿は、お振袖着せたんの物語。

五巾よもじで前垂七巾、前巾五尺の帯をしめ、俎板の櫛をささせて、杓子の両

差し、播粉木のこがえだんの物語。

臍はまた高きさんで、軀は小田原さん、お禪は越中さん、越中さんのたとえドンドンヤッコラセど、たとべさんの物語。

12 蟹 釣 物 語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。下の町くぐり外れ^{はず}のどて浜、蟹釣長太郎さんちようばこ舟コでのり出したんの物語り。

娘にやつこらさつと担がせてもつて行けば、どんな蟹でも七文だのんす。負けで呉ろちや長太郎さん、どうして負けられよか、命かんながらで釣った蟹、でき行けば三文だんよ、汝^にもねば、やつこらせと担いで、どんな蟹コだて八文だんの物語。

13 筍物語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。筍の言うこときけば、育れ育れとせめられて、わしほど因果な者はない。

去年の秋から固りてようよう出来たる筍よ、桶屋さんの兄あにさにもらわれて、割られて組まれて、はめられて、辱しと思たれば桶こが（子こが）出来たんの物語。

14 嫁入物語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。娘十七、八は嫁入り盛り、越後の国からもらい来た。タンス長持針手箱。これほど細々こまこまとしてやるに、必ず必ず出て来るな。

これや母かさん、そりやご無理、嫁と姑のことなれば、東が曇れば風となる。西

が曇れば雨となる。千石つんだる船でさえ、嵐が来るなら戻て来るんだの物語。

15 蜜柑物語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。紀州紀の国蜜柑の出所、そこで蜜柑の申すには、わしほど因果な者はない。

箱や籠へと詰められて、駿河の富士山横に見て、横浜港へ着けられて、ここは東京日本橋、浅草前にとさらされて、小僧や丁稚に買いとられ、わずか二文か三文で、色情で我が身を剥ぎ取られたんの物語。

16 ひぎづくし

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。お江戸吉原の仲の町で、芸者衆は三味をひく、在郷の娘衆は畑で豆ひき、大根・蕪菁をひく。助平は袖をひき、今の若い衆は渴れて色情いろをひく。大工は墨をひき、木挽どんは板をひく。馬喰は馬をひき、ねずみは餅をひき、猫は神座でチャカンと魚ひいたんの物語。

17 貧乏物語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。貧乏という棒は何木で作るか物語。へやみという実を播ぐじゅど、荒れ根どいう根つこ出て、それが育おがつてくつじゅど、困まづかつたていう又木なつて、なじよされんばという葉さいてくる。そうすつど、喧嘩けんかていう花咲いで、これがへやみていう実ならせるさげ、その木で貧乏て

いう棒ば作るもんだの物語。

18 梟 物 語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。元日の朝間に、梟が家ン中さ入つて来たんの物語。さっそぐど隣さ行て判断たのんだところが、ホーホーと鳴ぐ山鳥は、借金山ほどあつても済す（茄子）と思わねば、高々^{たか}（鷹）でしれたこと。と判してくれだんの物語。ほれがらじゅもの、ほごの家運の悪れぐなたけど。ホーホー。

19 雇とり物語

ソーレ物語、語り候。語ればもつての物語。へやみ・という実は、貧乏という木になるもの、その木に止る鳥は雇とりという鳥で、夕方へなつと、何食う役に食うと、さえずってばりで、食い物のおごつた鳥。餌えばの悪いところには、決して下りない鳥だんの物語。

20 早口ことばと昔々

年寄が子どもをあやすとき、また子守するとき、よく歌つては子どもをよろこばせたのが、「早口ことば」の遊びである。その由来は、むかし、百姓に子どもが生れ、立身出世をねがって庄屋に名前をたのんだ。そこであるべく長い名前がいというので、えりこのんで長い名前をつけた。

「百千万万、千万万、兆吉兆、兆吉兆、ちようぎの別当、スットントン、ちようけりけつぽの又次郎、栗搗く稗搗く、肥後（へんご）の守、ぐるぐる舞の弥兵五郎」

ところが、ある時、子どもが誤をして井戸に落ちた。人手を集めるのに、あまり名前が長いので、知らすのに時間がかかり、ついつい一命を落したという「むがし」がのこっている。このむがしに出てくる子どもの名前は語り手によって違つた早口ことばが使われ、中には贅女の遺産である古代神系の唄まで転用され、それを酒席の笑い芸にする人さえあつた。

へ ピッチピーカラカラ レンチャラポ レツチャヘツカ スツコツコ キツコ
モツコ ギロマイタ

へ ジギヨキヨ ジギヨキヨ 油こうじのまつこうじ すいたかすいたか 新左
衛門の ヒヨツコラヒヨの兵木郎さん

へ カンキンタラ メンタラリット カンキン シモツク シツペシッタ コン
バカリン カンキン

へ ピーピーガラガラ レーチンボ レーチャーハーカー ギツコーボ
ギツコーモツコー ギヲマエテ アカタカ ハカタカ スツペンペー

へ ドンビツカラビツ スツカラビツ スカスカキンカノ キンプクリンノ
グーヅ グーヅ

へ 一びり ニンびり 三だいびりびり 四日の松原うちにして チョンチョン
合せて うりがねのくりがねの とりはたつたる竜の峯 刀の小反のぎいは
ぎつと申せば、ぎいりき源内弥兵衛左エ門

へ 東京立つ時あやア やよせーコロコロセー さんこの種サンコロリンコロリ

ンサイナー　はぁリンサイナ　リンサイナ　コロリンコロリン　リンサイ
ナー

へ
裏の抹香の木さ　百舌ア巢^{もず}をかあけた
何とさえずる　立ち寄りきけば

君はケンクリケンクリ　クリクリメンチヨのスッペンスル
ワアシクメヨード　ワニヨドクサーサ
ビックリガラスのショーギリショーギリ　ショガラリンと囀ずる
そりや　まだモツケダデンドデノー

へ
裏の山椒の木さ　百舌ア巢をかけて
何と囀ずる　立ち寄りきけば

※　君にやエツクリキャツクリ　キャツクリシントコ　リントコだが
車の中のあーやだが　さアさ　ビンナン　チョンナンチョンガラリット

するわいなつと おっしやいまーす

どれーだよ どれーだよ

※

君にエックリケエックリ ケエックリマエだか、リントウだが
車の中のあだか さアさ ビックリタラヅク フクトクデンジ

ビンナンするわいなつと 轉えずる鳥

※

常にヒックリキヤクル チャクル見えたが リントンカンだが
車の中のワエだか ビンナン チンナン チルワイナーと仰しやーます

鳥こやんでいる

第三部 わらべうた

呪文唄

遊びと悪口唄

子供の俚諺・戯れ唄

子どもの呪文唄

子どもが滑ったり転んだりして痛くすると、「ここは弁慶も泣いたところだ、強いさげ我慢我慢」と、呪文唱えて、プーッと息を吹きかけてやる。暗示にかかって、動転した気が静まってくる。

○ 綾アちゅうちゅう 錦さらさら ごようのお宝もって参れば チチンブンパ
ラリン 痛いどこ 向山のでぐさ飛んで行け プーッ

これでも痛みがとれないというとき、

○ のーまぐ さんまんだ ばさらんだ べえだまっか まかうしや
金銀の鎧をつけて 八叉の剣を持って アブランケソワカ

(経文、阿毘羅畔欠婆姿詞の転訛)

もし、瘤がはれたりすると、

○ 腫れらば腫れろ 柿の木ほど腫れろ す・び・ら・ば・す・び・ろ 井戸ほどすひろ
アブランケソワカ

軽いうちみやすり傷だったら指に唾をつけてこするとなおるが、いったん血を
見ると、どうしても気の弱くなるのが人情で、その時は次の呪文で大型の草の葉

を八折りにして傷に当て、手拭をさいてでも包帯する。

○ 子の血の道 父と母と 母の血の道 子の血を止める 父の血の道

アブランケソワカ

○ 父と母との血の道を 命も止る血の道の神 アブランケソワカ

昔、囲炉裏に絶さず薪をもやしていた頃は、トラコーマが雪国の風土病とされた。患らつて目縁を赤くただらせている子は、「赤目メヨ」とか「メッケ」とか言つて冷やかされ、氣の毒に、遊び仲間からも敬遠される。

○ メッケ ツツツ おれちや感染^{うつ}んな ツツ ツツ ツー

三度唾を吐きかけて疫病神を祓つてからでないと、仲間にまぜてくれない。もしかかつた時には「メッケ追い」という呪いをする。これは赤飯を炊いて、おぼこ形に握り、まぶたをこすつた穴あき錢と一緒にサンダワラにのせ、それに芋殻の箸を一本そえて、部落端れの人形立て場に納めてくる。箸は橋にも通じ、それを渡つて、メッケは消えてしまえと祈る。

○ メッケ メッケ この一本はし渡つて つん拔げろ つん拔げろ

初霰が降ると、それを直接手に受けるか、大きな木の葉に溜つた汚れのないところを取つて、まぶたをこすつて呪文をいう。

○ 初霰こ おれア目 良ぐえしてくろ ほえども殿様も 出んなよ 出んなよ
下まぶたにできたものもらいが、ほえどで、上まぶたに出来るのが殿様とちやかす。また名月も目の神と崇め、小正月の十五日の晩、往還の辻に自分の年の数だけの雪玉をにぎつて供え、灯明しめして「あどさまあどさま、おれア目、良ぐして呉ろ」と祈願する習いもある。

目の中にゴミが入ると、目玉より大きい物がゴロゴロしてるような感じで切ないものである。目のゴミはこすらないで涙で流せ——といえから、近くに乳飲子を持つ母親がいれば、目の中に母乳をしぼり、洗眼してもらうのが一番であるが、呪文はいつでも手近かである。

○ 眼がんの眼まなぐさ ごみ入った えいぞいぞ えいぞいぞ 地藏さま取つて呉ろ

ツーツー（唾を吐き捨てる）

○ おれア目さ ごみ入った 東の角に門を立てて 十や二十や

蘭じや あららぎ 取つてたもれや アブランケソワカ フーフー

味噌ッ歯が抜けたら早くよい永久歯が生えるようにと祈つて、下歯だったら屋根の上に、上歯なら床下に放り投げる。

○ 茄子ッ歯 くぬぐり歯 おれア歯まだ鬼の歯より早く生えろ

茄子の早漬をたくさん食べると、白い歯が黒く塗る。そんな状態をたとえて、味噌ッ歯を茄子ッ歯という。どうかしてカクカクリ動くと、糸で囲炉裏の灰ならしを結び、分銅にしてゆり動かすうち痛みも知らず抜けてくる。だが虫歯が痛みだしたら泣きの涙で、そんな悠長なことではおさまらない。

○ 天竺の権 河原の柳虫 葉食つても 根ば食うな アブランケソワカ

昔は梅干のシソの葉を頬に貼ったり、燕の糞を詰めるとよいとか、あるいはボシノクボの毛を三本抜いて、紙に包み、屋敷の梨の木に結んで下げるといふ伝え

もあつた。後にはよくヨーチンを塗ったり、正露丸や仁丹、あるいは化学調味料など、虫喰穴につめ込んで急場しのぎにする。

幼児が癰がさすと、ボンノクボとこめかみ、それに小鼻の付け根に、キセルから脂をとってつけてやる。さらには子どもの中指の先のひらに塗り、その指を内に曲げて掌に接触させる。じつと透かしてみると、ふしぎなことに、繊細な糸状のものが指先や関節から、フワフワ抜け出してくるのがわかる。これが癰の虫だという。

癰がこうじると、やたらと鼻水や涎が出て、口のまわりをなめまわして唇と見さかいつかないほど、赤くただれさせる子がいる。鼻の下をなめるのが「なめ癰」で、下あごのあたりまで濡しているのが「ベロ癰」である。スポンジ状のカマキリの巣をみつけたら、それをとって、口のまわりをなでつけると治療にも予防にもなるという。そのとき唱える呪文である。

大人になつても傷跡が残るほど、子どもの頃はよく瘡になやまされる。瘡の出るのは白山さまの息のかかった草木にふれた罰だと言って、赤飯を炊いて、芋殻の箸を供えて白山神社にお詣りする。

瘡は蛭に悪血を吸いとらせるのが一番であるが、年中蛭を用意するのは難しい。ウミを出す時に剃刀のような刃物を手にもつて、患部を切つ払う素ふりで呪文をかければ、瘡はウミのみか核までしぼりとれて、後続を絶てる。

○ 天竺の権河原の根無草 水もない 土もない なぜ生えた根を切れ 葉を切れ アブランケソワカ

○ 切つて切つて 切つ放せ もと切つて うら・枯れるように アブランケソワカ

喉に魚の小骨をさした時は、呪文唱えて象牙の箸で喉肌をなでつけるか、生飯を嚙まないで、大口に呑みこむと棘は容易にとれる。

○ 天竺の権河原に水絶えて 鵜喉を通して 米のたえ骨通して アブランケ

アブランケ アブランケ

○ 天竺の五条河原の渡し舟 返せ戻せ 鵜喉通せ アブランケソワカ

○ 薬師の前の祓い河 掃き込め 掃き返せ 掃き込め 掃き返せ アブランケソワカ

○ 左（左右どちらか刺された方） 薬師 オンコロコロ千成り 後返し アブランケソワカ

昔、子どもはぐみの実や木通の実を種子も吐き出さないで、むさぼり食って糞詰りに悩まされた。そんな時の呪文である。

○ この大川の奥に、十艘の舟あり 一艘残して九艘下る アブランケソワカ
夜糞のくせをなおしたい時は、土間に臼を伏せて、そのまわりを呪文となえて、三度まわる。

○ 夜糞の別当どの これがらばばたれは 夜中に行がなえで 昼間行ぐよに
アブランケソワカ

腹をこわした時は「逆唄」のような次の呪文を使う。これは風邪でも何にでも効くという万病薬みたいなもの。

○ 頂上の奥山のホラの貝と 夏降る雪の黒焼き 蚤虱の肋骨 煎じて吞めばなおる アブランケソワカ

年寄の添寝で育つ子は、子守唄がわりによく火難盗難除けの呪文をきかされ、早口唄のように調子がよいので、小耳にはさんで覚える。就寝の時にこれを唱えると「怪」におなされないともいう。

○ 寝るぞ根太 頼むぞ垂木 梁も聴け なんぞの時は起せ唐紙
アブランケソワカ

○ 寝るぞ根太 頼むぞ垂木 さし柱 何事あらば起せ胸板
アブランケソワカ

○ 氷の柱に雪の桁 雨の垂木 露のふき草 アブランケソワカ

物を大切にしまい過ぎても置き忘れることがある。忘失物などを探す時、

○ ここに出で給えしや 失せたる○○○ 音羽の滝の水 失せることも見出かなわん

○ 西行の麻の衣を縫うたびに 失せたる針の出ぬことなし

西行の方は縫針を見失った時の呪文で、これで発見できればよいが、さもないと、誰が誤って怪我するようなことがあつては大変である。どうか大事なようにと祈つて唱えるのが次の呪文である。

○ 清水の音羽の滝に針失せて 失せたる針は 見出でかのわぬ

女の子が針を手にするようになると、きつと教わることである。また糸をこぐらせたのを解くとき、次の呪文で糸口をさがす。男の子とて風糸をいじるから、よく覚えておく。

○ シヤシヤム シヤシヤ ムシヤシヤの中のシヤシヤム シヤシヤ シヤシヤムシヤなければ しょうがなし

墓地の近くとか、人形立て場とかいう曰くつきの淋しい所に、道連れもなくさしかかると、泣き出したくなる。また日暮れに大人たちの夜上りを待つて独りで留守番するのも、やるせないもので、そんな時に勇気がわいてくる呪文がある。

○ のーまくさんまんだー ばらさんだー えーだーまーだー まがらさんだー
どーかんまん

道路で見知らぬ犬と出会っても、たとえどこかの飼犬であろうと、気味わるいもので、敵愾心を示さず、素知らぬふりで行きすごせ。あるいは犬の目から視線をそらすな、など心構えは人さまざまであるけれど、落着いて呪文を三度唱えたら、どんな猛犬でも犬の方から避けて行くから恐くない。

○ 大阪の坂の坂 中の節なし犬 アブランケソワカ

○ 戌、亥、子、丑、寅——（戌から始めて寅で止め、三度唱える）

山や野をかけめぐる子供たちの履物は、まだゴム靴やズック靴の出ない昔は、素足に草履か足半を履くしかない。それでも鼻緒に赤い布をつけるのは蝮除けの

呪文である。蛇をこわがる人は性分で、大人になっても山に入る時、蛇呪かけるのを忘れない用心ぶりである。

○ この先に大柄虫がいたならば 山鳥姫にきかせるぞ アブランケソワカ
○ この藪に大柄虫がいたならば 早や避けるや わしは新地嘉門殿の家来なり
アブランケソワカ

○ 長虫長虫 千萱峠のかぎ蕨の恩ば忘れんな アブランケソワカ

養蚕農家では、蛇を敬って蛇を呼ぶことを禁忌して、長虫とか大柄虫といった。山鳥は蛇にとって強敵で、抱卵中に蛇がおそうとわざと逃げないで体に捲きつかせてから、急に翼をひろげて蛇体をのびさせてしまうという。

またある時、蛇が春の陽を浴びて、うとうとしていると、地表に新芽をのぞかせた千萱ちがやに胴体をさされてしまった。それがなかなか抜けしないで弱っていたのを、蕨が下から蛇体を押し上げて助けてくれたという蛇の伝説から、蕨を一本手折って身につけて山に入ると、蛇の難は絶対にさけられるというのである。

漆に負けるアレルギー質の子は、漆の木にふれた指で肌にさわると、ところかまわず氣ぶれて大騒ぎする。木に直接ふれないでも近づいただけで、目が見えなくなるほど顔をはらす子もいる。漆と氣付いたら、すぐ呪文を唱えること。それでも氣ふれた時は、沢蟹をとってつぶして液をぬると即効がある。

○ 親なら負けでも 漆にや負けねえ アブランケソワカ

男の子は蜂の巣を発見すると、にわかに強くなる。何でこれしき退治しないでおくべきかと。まず特攻隊は蜂にさされない呪文をかけて勇しく巣に立ち向う。

○ 大麦 小麦 二斗八升 臼で八升 箕で八升 蜂の羽根ぶっかげろ
アブランケソワカ

呪文の効目なくさされたら菌糞をとってつけるか、小便をつけられはれないという。一方、直接手を下さない組もそば杖を食わないようにと、

○ 寄つつかねえば くつつかねえ アブランケソワカ

これは蛭除にも使う。田圃や小沼に田螺拾いや小魚すくいに入った時、吸いつかれる。蛭はしつこく腹一杯血を吸わないと離れないが、手に泥をつけてこする

と、呪文が効いてポトリ。大人でも蛭の多い湿田で働く時は、この秘伝にすぎる人が多い。

雪の山村は雪崩がこわい。遠い道のりを通学する子ども達は、積雪がしまり出すと、近道をかけたがるので、どうしても、わかば（表層なだれ）の危険がでてくる。季節がくると大人達は口をすっぱくして注意するので、学校に上がるような子は、誰でも雪崩呪文の一つは身につけていた。

○ 天竺の権河原のしまり雪　しばし止まれや　アブランケソワカ

○ 藤づるの入ったかんじき履えったぞ　アブランケソワカ

○ オンアボケヤー　ベーローシャー　マガモグラ　マハニンノーマー

ジンバラハラ　ハリタヤウン

○ 戌、亥、子、丑、寅

恐い犬をおだめる呪文でもあるが、わかばのいそうな場所に近づくと、歩を止めて大声で三度唱える。しばらく様子を見て、まわりの雪に何の変化もなかった

ら青信号である。

地震と雷はこわい天災として避難の仕方をしつける。地震が訪れたら、堆肥塚こえづかに上れ。あるいは竹やぶに逃げろという。さいわいというが地震はめったに経験しなかった。でも子ども同志でコタツの布団の奪い合いがもとで、櫓をひっくり返したりすると、よく「地震バラバラ」と唱えた。どんな遊びでもふざけっこがこうじて乱暴になると落ちは、「地震バラバラ」である。バラバラは崩かいの状態を言ったもので、呪文ではなさそう。

へ 夏の夕立 良ええかつか 雲の間の稲光 かつか 蚊か蚋かつり線香立て
おへそかくせ トンチンチンと かかトチレ なんとかか アーかか
えー かかえ

裸ン坊に着物を着せようとする時の子守りのあやし唄で、幼児語で「かつか」と「かか」が母親と着物と同じ意味で、こんがらかるところが味噌である。雷が鳴ったら早いところ蚊帖に入って線香を立て、着物を着てるのが一番の安全とい

うのである。

屋外で雷にあった時は、大樹の下にだけは雨宿りしてはいけないうと、固くしつけられる。大木の多い鎮守の森で遊んでいて、ピカリゴロゴロと来ると、どんなに面白く遊んでいても、一目散かけて帰る。途中で雷の大きらいだという桑の木を見つけると小枝を切り、頭にかざして、

へ カンバラ カンバラ

と唱えながら逃げる。カンバラはクワンバラで「桑原」の訛りである。

へ 愛^{いと}し殿ごの穂前田が割れた 四角三角十文字に割れた

女ながらも雷さまよ 天にゴロゴロ下にはバタリ落ちないように

年寄動転させないよに 子どものへそ抜がないように

鳴ってくられや 雷さまや

あげてまりで遊んだ頃の昔てまり唄である。類歌では他所に雨乞いの唄と伝えられるものもあり、また歌詞の中に避雷の呪文らしくとれる節も見受けるが、この地では雷はもっぱら落雷が捕ったときの約束という「桑原桑原」でしずめてき

たようである。

道草あそび 悪口唄

安楽城は県の北端れのさびしい山国で、集落が散っていて、往時は学校に四キロや五キロ以上もある遠路を徒で通う子もざらにいた。往きは部落の子たちで集団を組んで登校するが、下校時は大荒れでなければ大抵授業終えた小さい子の組から、同じ方向にかえる者たちが寄って校門を出る。村の中樞を遠のき、幾つか部落を通過するにつれ、群のさえづりもだんだん細まって行く。

ともあれ、小さい子等は学校であばれた疲れも出るだろうし、集団が減るにつれて心淋しくなつて来よう。何とはなく先を急ぎそびれ道草を食う

ことになる。それでも路上であそぶ分には、後からやってくる同じ部落の上級生に追い抜かれて、すてられる気使いはない。やがて自分の部落にたどりつく時にはいつも上級生と一緒に、「ただいま」となる。

こんな時の道草には、ジャンケン遊びの「何歩何歩」や「荷物たがぎ」沿道に電柱や電信柱の立ち並ぶところに来れば、「太陽か電柱か」の鬼ごとか、状況によって「影絵踏み」^{かげぼち}などが親しまれる。中で雨の中を雨具をつけたまま構わないで楽しめるのが、「言葉遊び」であって、この種の遊びは辺鄙な部落の子たちほど沢山伝承してきているようだ。多分は学校通いの手形だったかもしれない。

○むだ口の言葉遊び

「誰々さん」と名指しで呼びこんで、返事をさそって、その言葉尻をつかまえて茶化する。

——ハイと返事した場合には、

へ ハイと蛤長之助 朝から晩まで下肥担ぎ へ ハイカラ姉さん

へ ハイカラ姉さん 瘡くさこ出でン額び

— ウンと答えると

へ ウントコどっこい ほうれん草 お前の母さん 出でン臍へそ

へ ウンと糞尻うんこけつ 胡麻尻けつ はだげて見だれば 糞尻

— アという返事なら

へ 赤倉奴やっこの尻見ろ 焼やけで真黒だ（赤倉は昔大火があつた所といわれる）

— 呼んでも返事がない時は、

へ 「誰かさん」ても 返事がない 鼻かけ聲むこでももらたがな

（あるいは「瘡かさかき嫁でもとつたかな」）

— さらに呼び続けても返事がないと、

へ 三べん呼んでも返事がない 障子のかんげで 何しつた

へ 三回呼んでも返事がない ぐるつと廻まわつて ワンと言え

秘事にさわるようないや味を言われたり、あるいは畜生扱いまでされては、や

り切れたものでない。さりとて、こちらでも仕返ししてやろうと思つて同じことをしようものなら、かえつてやり返されてしまうだろう。

○真似こぎ

へ 人真似 こまね このやの狐 粕食つて追つた^{ぼわ}

へ 人真似 こまね 猿の顔^{つら} 真赤だ 牛蒡^{こんぼ}焼いで ぶつからめ

猿の尻さ たご[・]いった

ああ言えはこう、こう言えはああと、悪態が次々と続くので仕返しのチャンスをつかむのが、またむずかしい。

○んだそうだ

へ んだそうだ そうだ村の村長さんが ソバ屋でソバ食つて 死んだそう

だ 葬式饅頭でつかいそうだ 中の餡^すこ酸^すつかいそうだ

他人の言葉に肯いたり、あるいは賛意を表わす時によく「んだ」という。そんな言葉尻をつかまえて囃す。しかし、「んだ、そうだ」は、本来は他所言葉で、土地では「んだつけ」と言った。この唄が村に伝わつたのは昭和に入ってからだと

いう。

○一イニイ三ン

へ 一イニイ三ン四イ 牛蒡食つて屁たつた。

六、七、葉っぱで 尻の・ごた

九ウ十ウ 十に とうとう逃げちやつた ヤーロー

子ども達が何か目的あつて、順番をきそうことが起るとする。学校の帰り路、休ん場の涌泉を汲んで渴をいやそうと、ずつと手前から大声あげて「一イッ」と、一番のりを宣言する。他がそれと気付くと、あわてて、二イ三ンと名のりが続く。遅れをとつた者がいささか癪であろうか、こんな時の冷やかし唄である。それでも、強引に割込もうとする者がでると、

へ 先ぎ言た者勝ち 後言た者糞勝ち

と、けん制されてはじがれる。

○ほら吹き

へ ほら吹き 嘘ずほこき だ・す・う 百一 万八 嘘ずほ初 清水の平治

相手の口から出た言葉が嘘であり、法螺であると気付いたら、嘘つきの異名をたたみかける。嘘初は中村の初吉といって、清水の平治と共に明治の頃、実在した駄法螺吹きで頓智のよい仲介人で、その言動は語り草にもなっている。

○ずほこぎ

へ すほこぎ 針溝通れ

質のわるい嘘言や約束違反には、こういつてやりこめられるが、「ずほこぎくらえご」とて、軽い冗談で嘘をついて人をかつぐという遊びをする。道を歩きながら素知らぬふりで嘘をつき、それを乗せる。うまく引つかかって動作にあらわしたり、あるいはすぐに反論につまると、「二丁貸した」となる。そしたら先方もなんとか嘘でお返しせねばとなる。

○かつぎ唄

へ 誰々さん 落し物

足袋落ちっだ

箆落ちっだ

― (返し) 足の跡

― 度々 ご馳走さん

― ヘラヘラ言うな

コンニャク落ちっだ

― コニャコニャ言うな

落物問答というか、尻取り式である。唄というほどのものでないにしても、子ども達は道草にはよく口遊んだ。

○盗人かすびと

へ 盗人 かすびと 粕食つて追っだぼわ

一見、大した大事そうでもない路傍にある物でも、おれが先に発見したんだからおれなだ、寄越せ、否だの言い合いから、呉れ、否だ。貸せ、貸さない ― それが奪った、盗られたとなり、大げさに盗人呼ばわりにまで進展する。

へ 盗人 かすびと 人のへんかげんな

誰かさんの仕業だから、私のかかわりのないこと、後で人のせいになどするなよ。これはまた横取りされそうな時の予防線にもうたわれる。現代っ子は、

へ 盗人、泥棒、スリ、かっぱらい、ギャング、強盗

と囃している。

○あがめてえ

へ あがめてえ あがめてえ 尻搔えけつつけ 尻搔え

欲しいごんだら ここまでごんざえ

上げたんじゃないから、返してくれというのに、どうしても返そうとしないばかりか、戯ふざけてアカンベエをした上に、お尻かゆが搔いといって自分の尻を叩きながら、「ここまでおいで」と逃げて行く。拒否のデモンストレーション。

○いっきびかっきび

へ いっきび かっきび ばぢやかぶり

悪態について逃げるはずみに、つまづいたりしたら、それ見たことかとはばかり、追い打ちをかける。いっきびは「よい気持」、かっきびは語呂合わせのための挿入か。ばぢやかぶりは「罰当り奴」という意味である。転んでどこかを痛めたとしても同情もなく、かえってよい気持ちで気が晴れたとあつては、相手も頭にくるだろう。でも子ども達は大きく根にも持たず、よりの戻るのも早い。

○痛えごんだら

へ 痛えごんだら、いたちの糞つけろ 搔えごんだら かえん餅ぶつからめ

虫の居所がわるいと見え、ちよつと体に触れただけで、大仰に「痛いっ」と声を立てる。そんな子をひやかす。さらには尻とり唄に開ける。

へ 痛えがりや いたちの糞つける つければ汚ない 汚ながりや洗え 洗え 冷でえ 冷めだけや暖れ 暖れば熱い 熱がりや退れ 退れば蚤食う 蚤食つたら搔げ 搔げば痛い 痛がりやいちの糞つける

○泣き虫 毛虫

へ 泣き虫 毛虫 つまんで捨てろ

これは実際の毛虫を指して言うのではない。ちよつとしたことにも、すぐベソをかいたり、泣き声出したりする者は仲間からの嫌われ者、それを毛虫になぞらえてひやかす。泣くよな子は仲間に入れないぞという宣言でもある。

○泣きめそきめそ

へ 泣きめそ きめそ 大根一本 背負えない 一本橋渡れない 渡れない 泣きめそはめそめそした、めそつかき童。きめそはきめる奴で、仲間と気持を合せて行けないで、ひとり離れてむんつくりんになる童のこと。どっちも弱虫で

あることにちがいない。弱虫は大根一本も背負うことができないし、その上小心で、容易に一本橋も渡れない。往時、山里では沢や水路などに一本の丸太を横倒しに渡しただけの橋がよくかかっていた。それを渡らなければ野や山には遊びに行けない。

○泣きみそ こみそ

へ 泣きみそ 小みそ 橋の下の びだくそ（牛の糞）

泣きめそ、泣きみそ、どっちが訛ったのか、この唄はいかにも汚ならしそうに、指で自分の鼻をつまみ、鼻つまみならないという素ぶりでひやかす。

へ 泣きみそ こみそ 髪一本呉ろちや ベーガベガ

握った手から人差し指だけつき出して、鼻柱をこするような動作を、ベーガベガという。肩をすくめながらそれをやって、いかにも辱しいことだというふりをしてからかう。

へ 泣きみそ こみそ 大戸かんげの陰の びだくそ ジャギモギ突っつけ

まわりの仲間にはやされ、体のあちこちを突っつきまわされては、大きな恥っ

さらしである。ともかく、弱虫をひやかすいろいろな唄も、これがまた弱虫を励まし元気づけるのに役立つのかもしれない。

○内弁慶外みそ

へ 内弁慶 外みそ 家の前の馬糞茸め まんぐそだけ やーい

やせ犬みたいに、自分の家の前では大威張りだが、一步圏外に出ると、もうみそっこの意気地なしである。それをからかう。馬糞茸はよくごみ溜や馬糞などに生え、見たとこだけで食用にならない。

とにかく弱虫でも自宅前で遊ぶ時は、いこじいこじ背負って遊びの主導権を握ることもある。そんな時、仲間に加わりたい者がきて、もし受け入れられなかったりすると、こう言い捨てて口惜しさを晴らす。

○行がなえこ

へ 行がなえこ 来なえこ ひとの家の土踏むな

口喧嘩のきまりはこの唄である。もうお前さんとは行ったり来たりしないから、おれの家の土も踏んではならない。絶交の宣言である。子ども仲間では小さい争

いも遊びの一つ、喧嘩口論も仲のよい証あかしであつて、たくましく育つて行く一つの過程であらうか。

○いざりのり

へ 行たちや 言葉の一言葉 先ぎのドンコロ 物言うな

痛えたて 搔えたて おれア知らなえ

へ 痛えたて 搔えたて こっちあ知らなえ

後のドンコロ 物言うな 行つた返す エンキエンキザー

人間を丸太だなど、まるで喧嘩の捨てゼリフみたいな乱暴な言葉使いである。

でもこれはソリのりや、いざりのりの遊び唄であつて、相手をやりこめ、威したりするためのものではない。

大人のソリを持ち出して、何人も並んで百足むかでのようにまたいで坐る。これで長い坂道をすべり下る。あるいは笹の葉や杉の小枝を手折つてたばね、お尻に敷いて、堅雪の山の傾斜ひらをすべる。いざりのりといつて、とてもスピーデーで、しかもゼットコースターにも似たスリルを感じずる遊びである。

先陣かけてすべり下りた組の姿がかくれて見えなくなる。途中で事故もなく滞りなく着いたか、すぐ続いて行っても危険がないだろうか。第二陣は大声張って歌って確かめる。それに歌が返ってきたら、何事もなかった証^{あか}しで、無事OKとあって、「エンキエンキザー」と始動に入る。いわばこれはいざりのりの唄のシグナルなのである。

○名前にヘイとついた者

㇏ 与兵、五兵、徳兵、二十八ッ兵衛

道草くつていると、行きずりの大人から「遊ばなえで行げよ」と声がかかる。

おそらくは誰かの親戚か、知合いの家の人でもあろうか。それに対して子ども達が、こう返すところを見ると、兵衛の付く屋号の人かもしれない。事実、昔は男で、平とか兵衛とかの付く名前が多かった。一平、仁平から始まって沢山の兵衛がいる。そんな名の子をひやかした。㇏一平、二平、三平……から続けても歌いい。

○佐藤・高橋の姓の子

へ 佐藤・斎藤・犬のくそ 高橋・沓沢 雪の解^けけぎわの馬糞^{だんくそ}

安楽城では大沢地区が佐藤の姓が断然多く、過半数を占める。学校では姓を呼んでも多過ぎて混乱するから、子供の姓は抜いて名前を呼ぶのが習いとなっていた。いつも屋外なら、ところかまわず転つてるのが犬の糞で、佐藤の姓もそれに似て、いたってありふれた存在であるという意か。斎藤は珍しいほど少ないが、語呂のつながりで佐藤に次いだのだろう。

差首鍋地区となると、高橋と沓沢が群を抜いている。春の兆候がみえて、道路の積雪がどんどん消え出すと、今まで目立たなかった路上の垂れ落しの馬糞が雨雪に浸り濾されて、糟が一面に敷きつめ、ソリの滑りまで鈍らせるとなげかせる。いうところの「雪解の馬糞道」であって、こうした姓の子をからかう。

○越中富山の薬屋

へ 越中富山の千金丹 鼻糞丸めて万金丹 白墨削って粉薬 馬の小便水薬
富山の薬屋さんが毎年季節にたがわず、常備薬の取替えにやってくる。これはその姿を見かけて茶化すほどに、毒氣のつよいものではない。土産にもらった紙

風船をついて遊ぶのにも歌われたことからして、悪態どころか、何かあどけない親しみがひそんでいるようだ。大正のころに、菓の行商に日清戦争時の軍装で、手風琴を奏でてやってくる姿も見受けた。子ども達も物珍しく村外れまで後追いかけたものである。

○むがさりむぐった

へ 婚礼むがさりむぐった 仲人嬢あ流った

嫁付あ汚った 樽背負出 弛たるだ

ひつ背負いひつ返った

聶ね殿だむずさえ 童達笑う

昔、山里の婚礼は徒で道中しなければならなかった。むがむがさりさりが部落を通過すると、子ども達は屋締縄をない、それを路に張って、はつとかけ（とおせんぼう）、心浮き立たせながら待ちかまえる。いよいよやってくると、物見高く部落中の老いも若きも寄つてきて、嫁見が始まる。そしてたんぎ唄がいくつか披露されたところで路も開かれ、多くの祝福をうけて道中は先へと。昔のむがさりは、

どこかのんびりしていたようだ。

○あねこからかい

へ あねこどさ行ぐ 赤い樽さげで 向えのおじこと 定め酒

へ あねここちや向け んまい物食せる 蜜柑の皮むいて 中食せる

へ あねここちや向け かんざし落ちる なんぼ落ちでも 買ってもらう

子ども達が道で他所の若い女の人と行き交うと、通りすごしておいて、いたずらっぽく、こんな唄を浴せる。だからといって、大した不良性を帯びているわけではなく、至って天真らんまん、通りがかりの姉さま方も、「なんたらこつねた（すねた）童達、やらしぐなえ（にくたらしい）」などは口にもしない。かえってほえみを返してすぐに行く。詞は誰でも知っているはやり節の笑い唄の類である。

○部落ぐるみ悪態づくし

へ おべた振りの○○兵衛 鬼この○○エ門 大飯食いの○○エ門 八尺

建った○輔 鉄砲まえの○内 人真似鳥の○吉 南蛮喰いの○九 くぐ

ぬき唄の○蔵 反歯の○○八 鼻たらしの○○屋 こうのとりの脚の○○

エ門 神楽獅子の○○兵衛 えこえこの○○エ門 こへんかきの○助
人なりきの○吉

▽おべだふり（知ったふり） くぐぬき（鼻） こうのとり脚（長足）
えこえこ（苦情たらしい文句たらたら） こへんかき（粉食い）
人なりき（他人の言いなり）

現在の砂子沢部落は百軒近くも軒を並べ、安楽城地区一番の集落であるが、往時は出水期には危険地帯とみなされ、そのせいか民家たった十六軒しかなかった。かえって対岸の野崎が戸数は大して変わりなかったが、家並が密だったせいか、奥地住民からは「宿」^{しゆく}呼ばわりされていた。今の両部落をくらべてみると、もう隔世の感がある。

ともあれ、唄は往時十六軒の男衆の特徴をとらえて茶化している。しかも道順になっているから、唄で案内する部落図ともいえよう。大人の戯れ唄であっても、子ども達にも早口唄として口遊まれたこと、もちろんである。

○男と女（ど）

へ 男ど女ごと ちようれんこ あんまり寵ちようして 泣がへんな

男ど女ごと 豆炒り 炒つても炒つても 生なんまくさえ

ち・う・れ・んこの語源はどうなのか、庄内地方では「情仲間」、西村山郡の谷地では「ちようせんこ」と歌つていると、NHK編『東北の童謡』にある。いづれにせよ、男と女とよい仲で、あまりかわいがりすぎて泣かせなざるな、というのである。後の唄は戦後に、

へ 納豆納豆ねばる 東京納豆もつとねばる

と囃すのが流行した。

男女七才にして席を同じゅうせず――が、戦前の訓で、小学校に上るくらいになると、男の子と女の子が、あえて一緒に遊ぼうとしなかった。仲よく遊んだりするのを、他の集団にでも見つかるかとひやかされる。なにせ学校の雨天体操場、今の体育館など、男女別棟に建つくらしいの時世である。

とはいえ、部落内での生活では意外と仲よく遊んでいた。学校から帰れば、下の子等の相手をして面倒もみなければならぬし、遊びにも少人数では興味のう

すいものもあろうから、この唄は他集団に対して放たれる悪態だったようである。

○おしたぐり

へ おしたぐり流行た はや 自生桃見えだ おべえも 落ちるど怪我する

へ おしたぐり流行た 鴨こが見えだ 弓ええが 鉄砲ええがズドン

着物の裾をまくり合つてふざけっこするのが、おしたぐりで、裾を股の下に通して、つまみ上げ、まくられないようにしつかり持つ。お互い隙をうかがつて裾をまくり上げる。悪口というより、これはふざけっこの唄である。野蠻でエッチと顔をしかめられそうだが、都会の現代っ子間にも、スカートめくりが流行るという。

自生桃は桃の原種で、成果は改良種と異なつてずっと小粒、梅の実よりは少し大粒か。何よりの特徴は果実の表皮は無毛であること。女子を卑しめて「自生桃」と呼んだものだ。唄は、無毛だから落下したら怪我するぞなどと、気のまわし方からして、ちよつと子どもの発想とは思えない。

男の子の持物は、かわいらしく「鴨こ」と呼ぶ。大人の戯れ唄にも、へ沢のく

ちやくちやさ、小鳥網かげだ、小鳥かがらなえで 鴨かがたーと、うたつてある。大正の頃までは、男の子も女の子も和服をつけ、尋常科の時は肌着の下はスッポンポン、互いに大事な物をまもりながら、大声はり上げて追っかけまわす、その天真らんまんさを想うだにほほえまれてくる。

○木のぼりひやかし

ゝ 女子の木のぼり 見たかえな 大工の墨つぼ 下たよださが

ゝ 男の木のぼり 見たかえな 紫むぐれんじ 下たよださが

子ども達は木のぼりが好き、野生の成り物をさがして、よく山遊びに行く。そんな時に、もし男の子たちが女の子たちに成木を先駆けられたりすると、くやしきまぎれに、「女だてらに木に上って」とひやかす。すると女の子とて、だまつていない。悪態のつき合いである。唄の内容は大人になっており、うたがいなく大人の戯れ唄であった。

○チョンチョコリン

ゝ 誰かさんの頭髪あだまさ チョンチョコリンが止た 早ぐとらなえど 芸者こ

なる

へ 誰かさんの頭髮さ チョンチョコリン止た 早くとらなえど ぼずこなる

仲間の頭髮に糸屑や草の葉などが付いてたりしたのを発見すると、手を貸して除^とつてやる前に、まず囃^としたててからかう。チョンチョコリンは、方言で、矮小の意味で、唄は「チョンチョコ虫止また」ともうたう。

もし男の子が手を出したいたずらだと知れると、女の子からも仕返しがある。

唄の「ぼずこ」はお寺の小坊さんのことでなく、方言で女の子を卑めた言葉である。男の子のくせして、おしやれつかして櫛^とかんざしさすなんて、女の子になるぞと、ひやかすのである。

○おしやれこ

へ おしやれこ しやれこ なんぼしやれても 惚^とれ人がない

鼻欠け髻でももらうんだ（あるいは、めぐされ嫁でももらうんだ）

普段にきれいな着物をきてきたり、頭髮にタケナ力をつけ、後にはリボンとな

る。履物でも自家製でなくお金出してそろえた物、いわゆるニューをまとうてくると、仲間は嫉みも手伝ってか、離立てる。

○初調髪祝い

へ 初調髪はつあたまのツールツル 屋根葺き調髪あだまのトーラトラ お祝い三つ 昆布

(こぶ) 三つ

大正の末頃までは村に一軒の床屋さんもなく、バリカンもあまり家庭に普及しなかった。男の子の調髪は多分カミソリで剃りこんだもので、剃り跡は青くツルツルである。下手なバリカン使いの跡も縞々に刈跡がつくので、初調髪は誰にもすぐ知れる。すると悪童たちがお節介にも、寄ってたかつてお祝いをする。

その祝いの昆布が「こぶ」だと、冗談高じて平手打ちになったり、ゲンコツではたかれる。音無しく祝わせてやらないと、不意打ちに手拭をかぶされ、引張られて布目に毛根がつきささって、ひどい目にあう。こんなことでも剃髪をおっくらがらせ、初調髪は男の子の泣き所であった。

○禿げ頭

へ お前の爺さん かんてつだ 剃^すったか 剃^すったか 一本もない

剃刀いらずの 丸もうけ

へ 禿げた頭さ 猫ちよつかいかけた 猫もよく見た 鯨とみた

へ 禿げた頭さ ボタ餅上げた これが本当の おはげ餅

へ ポッポ ポッポ 禿げポッポ 禿げた頭さあげご（または蜂） 止また

婆々ちや捕て呉る 逃げらった

へ パーマネントに火がついた 見る見るうちに禿げ頭 禿げた頭に毛コ三

本

頭部についての悪態といえ、禿をヤユした唄が多く、禿はごあいきようである。友達の後頭部にでも瘡こ跡をみつけると大仰に唄は始まる。これも元は大人の戯れ唄で、罪がない。

初めの唄の「かんてつ」は可鍛鉄の訛か。とにかく、金鉄のような堅頭であろう。そしてへポッポは唱歌「鳩ポッポ」の替歌であり、へパーマネントは、もちろん戦後の移入である。

○出ン額カツカ

へ でんび かつか ホイホイ でんび でんび 大出ン額

後出^{うしろ}ン額 前出^{まえ}ン額 傘^{かさ}いらすの大出^{だいしゅつ}ン額

面と向つて器量のみにくいのをあげて悪態つかれたとしたら、大きな衝撃であろうけれども、子どもの唄であつては他意もないことである。唄はおでこが出つ張ったり、広い者をヤユしてるようであるが、実は通学の道すがらしたたかに雨に打たれた後に、晴れ上がりに一息ついて囃し立てる。さした雨傘をすぼめもしないで、それをはずませながらあばげる（ふざける）のである。

○嫌われ者

へ 出^でン額で 鼻欠け 縮れ髪 臍は出臍で 嫌われた 嫌われた

この唄の出所はどこか、元はこれだけの文句ではなさそう。ゴムマリ以前のでまり唄でうたわれていた。

○めくされ鼻

へ 鼻の高いのは 天狗の鼻よ それより長いのは 象の鼻

ゴザかき鼻　獅子の鼻　先の開いたは　豚の鼻　豚の鼻　ソー一丁貸した

唄の文句は悪態のようでも、てまり唄としてうたいつがれてきたものである。

○めくされ面

へ　一に面長^{おもなが}　二に丸顔　三に角面　四に篋面^{へら}　五赤　六もつけ

七つり目　八鼻欠け　九盲　十焼げっ面

※篋面（杓子面でしゃくれ顔）　あが（霜やけ雪やけなどで赤く炎

症）　もつけ（疱瘡の残った面）　鼻欠け（梅毒の後遺症）　焼

げっ面（火傷）

美人である要素でも、それが度を越すと、めぐさい顔になる。唄の出だしは美人コンテストかと思わせ、順に下るにつれて不美人面づくしとなるとところが滑稽で、聞く人を幾倍もよろこばせる。

○長げえ面^{なん}

へ　一ツ　人より長い面　二ツ　二人とない長い面

三ツ 見だごとないくらい長い面

四ツ よっぱど長い面 五ツ 何時見でも長い面

六ツ 無類に長い面 七ツ 何でも彼ンでも長い面

八ツ やたらと長い面 九ツ この世にないくらい長い面

十にや とつくり長い面

数え唄形式で面長をヤユした唄である。何の理由でか、一節ごとに「○○の○兵衛ア面」を合の手に入れると、いきのよい早口唄となった。

悪口唄といっても、あくが強すぎて子供にしてはと思われるような唄、瞽女がのこした口説節がある。むかしは子守娘の中にも年頃になりかけた、しかも歌好きな娘っこが居って、それを口遊んだとしてもおかしくなかった。現代は消えて、若者の間でさえ歌われない。もし想い出せる年寄でも居たら、古謡をさぐる上で至宝である。

○めくされ口説

へ わしの女房 口説でないが 髪は赤髪 額は出^{ひたい}ン額^び

眼はかなつぽ眼^{まなぐ} 鼻では獅子鼻 口は裂け口 おどげは槍おどり

胸は鳩胸 臍では出臍で 尻は棚尻 お膳摺鉢上るよだ

足はかつぺら足 あがぎれきれる 腓^{こぶら}はギヤラクトこぶら

あぐどは松笠あぐど それでも吉原の花見て暮す

※おどげ(顎) 槍おどげ(トンガリ顎) 棚尻(物がのるほど出

張った尻) かつぺら足(偏平足) ギヤラクト(おたまじやく

し) こぶら(ふくらはぎ)

○嫌われ女子

へ 一に 板の間のようだ ひんむちけだ女子^{おなご}

二にや 苦虫食たよだ女子

三にや 散々不出来な女子

四にや 虱など浚うほどたがて

五にや ごだえぶし人より大きい

六にや ロクだと人にも言わんなえ

七にや し・ち・根性 それより悪い

八にや 裸でねるごど嫌いだ

九にや この世に無いよだ女子

十ど じゅんぶく諦めたんよ

※ひんむちけ（ひねくれ） ごだえぶし（手足の関節） じゅんぶ

く（ほとほと、十分にとかの意）

悪口唄は小気味よく口拍子もよいので、子ども達にはすぐなじむ。中でテンマリ唄、ショウナゴ唄として歌いついで来たものもあるが、多く歌われた場となると、何といつても道草遊びであった。ともかく、古いわらべ唄の聴きとりに来た時、悪口唄となると、僻地部落育ちの古老ほどたくさんのお想出を温めていてくれ、それを生き生きと語ってくれたのが忘れられない。

子どもがついてきた
俚諺・戯れ唄

生活の智恵としての「ことわざ」や「言いならわし」には、語呂がよかったり、また「しやれ」に富んでいるものがあつて、とかく親しみ易い。子どもでも気がのと口拍子にのせて、いつか自分達の世界のものにしてしまふ。

それにまた戯れ唄なども氣に入りで、どうしても大人の領分としか思われない唄であつても、小耳にはさんだと思つたら、もう遊び唄や手まり唄に替えて口遊んでいる。変曲、替歌の名人であるかもしれない。こうして子ども達の管理で継承されてきたと思われる唄もかなり耳にするとところである。

あさのにじ

へ 朝虹

川越しんな

昼飯 ひるま

たぐ所さ

蓑笠放すな

へ 朝虹

笠放すな

夕虹

空見んな

白虹

百日照る

朝早に虹の立つた日はその時、お天氣が快くても、急に変つて後で、出水のおそれさえ出てくる。川越するような所に出かける人は、よくよく氣をつけないといけない。また午後からはきつと雨降りになるから、昼飯持参で家を出る人は、雨具を用意するように。

白虹は好天の兆で、「白虹立つて三日間降らなかつたら、百日照り続く」とさえいうくらい。

へ

朝てっかり

聳泣かせ

姑かかあの

カラカラ笑い

早朝から照りつけるような日和は油断がならない。こんな時は一日中快晴かと思つても、午時分ひるから、きつと雨降りに変る。今日は上天氣とふんでミノカサの用意もなく、朝下りおして行つた稼人の聳殿は、さぞや今頃は困りこんでることだろう。それに引きかえ、聳いびりの意地悪姑はさだめし、ほくそえんでることか

もしれぬ。

寄り目のことを「てつかり」というが、照というのを遊んでそう歌い、次にカラッと晴れた青空を想わせて、カラカラと笑いと下げたところが、いかにも憎らしい。

へ 申まうこ日照り 午の半晴れ 末の雨降り

読んで字の如し。童達は口拍子にのせて、口遊び。この天気諺が本当に理解できて、身につくのは百姓の道もずっと経験を深めてからのことであろう。

へ 桃栗三年 柿八年 梨の馬鹿野郎は十三年

果樹は樹種によって実生から果がなるまで意外と歳月のかかるものである。今日の技術で接木すれば、ずっと早まるにしても、往時は古老の経験から推して、唄にある年数が見込まれた。数の組合せがとても拍子よくしている。

へ ひぜん搔きかき三年 また三年 なおって三年 名残り惜しくてなお三

年

皮膚はしつこい皮膚病で、一度かかったら完治するまで十二年もかかるだろう。なかなか治りがたいと歌う。一緒に遊んでいる仲間に皮フ病で搔ゆがる子がいると、からかう一方、伝染しないお呪いに予防線を張って歌う。

へ 六皿九皿も十五皿 七皿八皿も十五皿

動作がびんしょうを欠いていてもさつとしてると、こんな唄で囃したてる。六皿九皿は「もさくさ」に通じ、七皿八皿の方は快々の表徴。どちらも十五皿には変りはないけれどとヤユする。

へ お客三杯 手八杯 万八なて 底抜け底抜け

酒呑みはとかく酒となると目がない。客には「たてつけ三杯」などと態のよいことを言いながらも、客は肴であつて、手前の盃には、たんとなんと。手酌でたらふく呑んだあげくが大トラとなるほど、底抜けになるのが落ちである。

へ 上サラサラ 中バツタリ 下六寸

下々の開きつ放し

戸障子開閉の行儀をさとした諺である。荒々しい音を立てないで、静かに敷居をサラサラッと滑らせるのが上等。力が入りすぎてバツタリと音を立ててしまつたらまずまずとしても、五六寸も隙間をあけて閉めるのは下等といわねばならない。さらには、開けた戸障子を閉め忘れ、開けっ放しにするのが下の下というところである。

へ あした あさつて やのあさつて

ささつて もぐつて くぐつて一週間

明日の次ぎ明後日はあさつて、次の翌日はやのあさつて、そのまた翌日はささつてと明け、あとさらに二日重なつて一週間となる。そのもぐつて、くぐつては「潜つて」であるが、単なる語呂合わせ。また他所では「やのあさつて」と「ささつて」をちがえて呼んでいる所もある。

（野村純一氏のご教示で、あさつての次が「しあさつて」ということである。ただし、山形地方では「しあさつて」は使わず、「あさつて」の次の日は「やのあさつて」とか「やなさつて」と呼んでいる人が多いようである）

へ 孫 曾孫 ひこ やしやえご（玄孫） そそりこのへらごまで

ニヤンという音 きぎたぐなえ

或時、爺あつぎさまがねずみに恵ぐでやった恩返しに、ねずみの天国くに案内されて、もてなしを受けたとき、そのねずみが幾末代までも猫のなき声だけはききたくないと歌ったという昔話がある。「人間もへらごができるまで長生きすると、鬼才になる」といったもの。

へ 孫 曾孫 やしやえご 踏ん潰しや きしやご

孫、曾孫、玄孫と栄えて、その次はと期待したら、間引くかして踏みつぶしたので、ただの小さな螺貝になったとふざける。きしやごはうらつぶとも称し、こ

の螺貝は冷えのものとされ、生でつぶして臍に塗ると腎臓の妙薬とされた。

へ 親爺のヒヨロヒヨロ 息子の道楽 孫のぼうらく

息子は怠け者で、いつこうに働こうとしない道楽三昧。孫も家業を手伝わないどころか、毎日放楽放題、そこで親旦那の脛はかじられつ放しで、やせ細るばかり。これでは叶ったものでない。そうなればどうあつても――。

へ 蜜柑 金柑 酒の爛 親の折檻 子は聞かん

かんとつく言葉を組合わせ、さらには結びをば「嫁を持たせにや働かん」とも。

へ 薪 味噌 傘 下駄 提灯

この品々が、いつもきちんと取りそろえられて不自由ない家なら、まず暮し向きのよい証拠である。一方これはとかく他人や近所から借りられがちな品で、すぐ返してくれるものと思いきや、いつも貸したらずるずるべったりで、催促なしでは返って来ない。それと知りながらも、貸すのがバカか、すんなり返すのもバ

力か、というところ。

へ 氣持よりも 澄し餅 差首鍋よりも 肉鍋

「氣持だけでも汲んで下さつて」と言つて、何も出さずに済まされるより、澄し餅一杯でも馳走になつた方がずっと氣持よい。澄し餅は澄し汁を使った雑煮餅。差首鍋は土地の名であるから、鍋は鍋でも肉鍋とでは大ちがい。実利実益が優先であることをうたつた語呂のよい喩え言葉である。

へ 梅干食つても核なげんな 中さ天神 寝てござる

弁当に梅干を入れてみると、核はきつと家に持ち帰つたものである。山に稼ぎに行つて、よく茸や木の実など見つけたり、沢ガニなど捕らえると、ワッパに入れて持ち帰る。子どもはたまたまそれを開くのを楽しみに、父の帰りを待つ。でも、いつも栗の実、山ブドウなど山の幸が現れるとは限らないし、コロツと食べ粕の梅干の核であることもある。それでも山の土産と称して、喜んでしゃぶる。

酸味の抜けた味気のなくなったのが、子どもには手頃で、父親の味がのこるのかも知れない。

食い残しの梅の核は捨てないで、水屋隅に専用に備えたカメコに溜めておいて、やがてには梅の樹の根方に埋めて土にもどす習わしがあったものだ。また、梅の樹の下に立小便をしても、勉強が出来なくなるといつて叱られた。昔は天神さまの信仰が今よりもずっと厚かったみたいである。

へ 鶏食って ドリ食うな 蟹食って ガニ食うな

ドリは鶏の肺臓で、食べて食えないこともないが、生のうち見た目が毒々しい色で、ちよつと食指が動きそうにもない。川蟹は沢のぼりして、よく蛇類を捕えて食うという。その時に通称「ガニ」と言い、袴とも呼ばれてる所に、蛇の毒を抱えるから、ここを食べたら危険をはらむということを教えている。清音とそれに濁音がついただけで、無害か有害と大きなちがいを生ずるところがみそである。

へ 嬢や かんざむ 飯持まて来い

これこれ これでは蒟蒻こんじやくだ

味噌さえつければ 田楽だ

所望したのは御飯であるのに、出されたのは蒟蒻である。魚だろうと、握飯だろうと、はたまた豆腐、蒟蒻であらうと、味噌さえつければ田楽であることに變りがない。「かんざむ」は神ざぶなのかどうか。伝承の間に問答も多少抜けてしまつた個所もあるような気がする。ともあれ、子どもがお腹をすかして、仕度の出来るのを待ちかねると、よくこの唄を口ずさむ。そして箸でお茶碗叩いて、御飯を催促しようものなら、これはマナーがわるいと諭され、「化けもつこ来るぞ」と叱られる。

へ 坊さま 坊さま なして目 見なえ

おまんま こぼした その罰だ

鼓弓や三味線を持って門付けして歩く座頭の遊芸人を、ぼさまと呼んだ。そん

な目のわるい人を冷かして歌うというより、食事の時に、御飯粒をこぼして、それを拾わないと、お天道さまに罰が当たって、盲になるぞと諭された。唄はそんな時に子どもが自らをいまして、よく口にしたものである。

へ むがし むじげだ はなしア はじけだ なんぞ ながった

昔話を聞き終えて、他の遊びに移ろうという時、あるいは語り手の方で一服する暇もなく、せがまれてうるさくなつた時などにも、よく口にする。

昔話は機嫌わるくして、向きを変えて、どこかへ行つてしまつた。はなし咄は弾けてしまつたし、謎々はどこかへ流れて行つたので、もうこれで終い、しままた明日にしよう——というのである。

へ おうしろの おほしもちに おからすが おふつついて おほきおほき
と おほついて おいます

えや・使い（よそゆき言葉）には「お」の字をつけるようにと言って、程度によ

りけりである。何でも彼でも「お」さえつけければよいと言うものではない。「屋根裏にさげた干餅に鳥がよって来たので、ホイホイと追っています」というのに、「お」をつけたら、こんなふうになったという喩え。たと

へ 歌々え 歌々えて 言て呉ゆつさげ 歌々いでげんど

歌々うような歌 歌知らなえさげ 歌々わなえなだ

酒席で、いわゆる音痴がしつこく歌うことをせがまれて、困り果てた末には、よくこう言つて逃げる。氣取つてゐるんでも何でもない。ただ所望される様な歌を知りませんから、歌わないのです——というにすぎない。まわり歌が始まったら、この歌の逃げ口上も早口言葉として、好評の一つの芸にもみなされる。

へ 正月元日から呑み始めて 二日酔い 三日ふらふら 四日よかよかと
いつかこの酒さむるやら さむるやら

唄の内容から推して、明らかに大人の唄であつた。数え唄式に数字がうたい込

まれているから、手まり唄、し・よ・う・な・ご・唄としてもなじみやすく、いつのまにか
子どもの唄にかえられたのだろう。

へ 正月二日の正夢に まさゆめ 子宝生^うんでる夢を見た

とりあげみれば 玉のようなる男の子 祝いましょうか 幟竿幟竿
この唄もゴムマリが現れる以前の手まり唄として、よく子ども達に愛誦された
という。大津絵節の改作とわかる。大津絵や松坂には危つかしい下卑た詞も流行つ
たが、しかし、めでたい席などで祝い唄として、その本唄をよくする者は歌上手
として称えられたものである。元唄は、

へ ながきよの ながきよの とおのねふりの みなめざめ なみのりふね
の おとのよきかな

下から読んでも ながきよの 正月二日に正夢みた 宝子生^うんだる夢を
みた とり上げみれば 玉のようなる男子なり 祝いましょうや幟竿
尚武刀や 菖蒲草 アアコラコラ

へ 今日の出はり初め 歌い初め

もらた手拭のかぶり初め かぶり初め

昔は、女子衆は正月三日は門外不出とされ、四日に初めて出はりそめとする習わしであつた。親しくしている知人の家を訪ねて、門口に立てた松かざりから一葉ほどむしりとりつて、年頭の挨拶の標しに差し出す。そんな気安さで、日頃の茶のみ友達が寄ってくる。

何もお正月だからといって四角張り、高脚の赤い膳など出すこともない。囲炉裏をかこんで、甘酒が出され、やがてかぎのはな（自在鉤）に爛鍋がかけられるとなると、唄も出ようし、俚謡、雑謡の総ざらいとなるのも、極く自然である。おばあさんについてきて、半戸前で遊んでいた童達が、こんな雰囲気の中で、小耳にはさんだ唄が口拍子にのつたのであろうか。

へ 仕事しだぐなえし んまえ（美味）もの食だえし

なつたらええがろな 坊主ア嬢へ 坊主ア嬢へ

世の女性で一番樂に身をすごせる者は、お寺の奥さまと見たてたのだろう。こ
う歌つてマリをつく、ひょうきんな子守娘の姿が彷彿つとして来る。

へ 踊るて跳るて 今夜ばり 明日から田圃の稻刈りで

一ぱ刈て束ねて チョイと投げて 投げよが悪^{わる}りどて 叱られた叱られ

た

はっさく

農家は八朔を境に、昼休みをやめて、夜なべが始まる。これは奉公人の子守娘
にもこわい（つらい）ことだった。稻刈りが始まると猫の手も借りたいといわれ
る。たとえ鎌まで持たされなくとも、刈った後始末、杭かけや稲架がけのでこ（助
手）ぐらいには狩り出されたから、身につまされた口説としても口ずさんだ子守
娘も、中にはいたかも知れない。

へ それ掲げややれ掲げ あたりをからんで 中しようしよう

ソラ 中しようしよう

へ それ掲げ やれ掲げ そご掲げ 臍掲げ しんしょう しんしょう

ソラしんしょう しんしょう

往時は春先きに雪消えの路上が、一等の子ども天国で、早く雪を消してコマまわしやパッチ(めんこ)打ちができたなら、他集団に対しても大きな誇りであった。節が来ると子ども達が寄つて春を呼ぶかのように、力を合わせて部落の往還の雪を割つたり、搗き砕いたりして雪消しをする。

これは元来味噌造り唄である。煮豆を搗く作業では、杵の当りがそろわない方がよく搗けるなどと言つて、少し大きな子ども衆まで狩り出される。餅搗きとちがつて、杵の形までわざと不ぞろいな物が用意されたものである。本当の味噌搗き唄が家々から聞こえてくるのもそろそろで、もう桃の花が咲けば、味噌造りの最盛期となる。

へ 情^{いろ}で貸した金 は・た・る (催促) のか よ・ご・せと言ふなら 妾^{わし}がやる

十月待たんせ 子で払う 子で払う

へ トント豆腐売り 橋がら落ちだ あげて下んせ油売り

掲げるよけれど 色変る 色変る

これを歌つてマリをつく童達は、意味がわかつてかわからずにか、ともあれはがらかである。思春期にでも達した、ませた子守娘が、大人の戯れ唄を遊びにとり入れたのが継承されているのだろう。

へ 次郎兵と太郎兵は 柴田のあたりで 金玉落して 一生片輪となりあが
た

へ へーへでば寝らんなえ おればかりこうだか や・つ・ち・が・ない
しん・ち・こ（おちんちん）死ぬまで縛られて 赤彦なんとも迷惑だ

へ へーへでば 寝らんなえ おればかりこうだか や・つ・ち・が・ない
爺いさま金玉 ねずみにひかれ 嬢は泣ぎ泣ぎ「玉来い玉来い」と猫呼
ばる

へーへでば 寝らんなえ おればかりこうだか や・つ・ち・が・ない

や・っ・ち・ゃ・な・い——は取り乱しているとか、始末におえないとか。ともあれ、童達が家・ン・中・で・ほ・ご・つ・て（ふざけ）いるうちに、どうかすると笑いが止らなくなるくらい心浮いてくることもある。かと思うと無性にが・な・り・た・て、あげくは泣きたくなるほど騒ぎまくり、わけなくあばれて発散させる。

やがてには、「なんたい喧しねちや、耳鳴り雀だもン」と叫ばれかねない。そう言って叱りつける大人も、大方不快指数が高まって偏頭痛に悩み、雨降りに変わるうと思つてるにちがいない。「猫と童達のさわぐ時は、天氣が荒れる兆」といつて、こんな時の子ども達のさわぎ唄であつたという。

元は何唄であつたものか、あるいは流行唄はや唄の囃文句だったかもしれない。ともあれ、この元唄は明治中期にこの地に入つたものか、その頃から、大正の初めにかけて少年期を送つた年輩者が、ほ・ご・り・こ（ふざけっこ）をやる時に、よくこの「へーへ節（？）」を誦つたといわれている。

佐藤陸三さんの伝承資料

— あとがきに代えて —

武田 正

佐藤陸三さんのことをご存知の方は、少くとも県内にお住いの方なら多いはずである。

あの「安楽城のわらべうた」を採集復元されたうえに、地域の文化遺産として学校教育にさえ大きな力になったもので、わらべうたがこれほど美しいものだということを忘れてしまった現代に、よみがえらせてくれたのが佐藤さんであった。今でも、何かにつけ、テレビや県内の催しなどに行くとき耳にする唄である。

こんなことを言い出したのは、佐藤さんに叱られるかもしれないが、訪ねると、「酒を呑まない奴は来るな」と言われたとか、学者づらをしたり、紋切り型の質問などをすると、怒鳴られるなどと耳にしてはいたからである。真室川町安楽城といえど県内随一の豪雪地であり、その郵便局長さんでもあった佐藤さんに、

不躰けにお願いした『山形の民話』への寄稿を快諾されたときには、だからひどくうれしかった。

『山形の民話』五三号（56・5）に「早物語と早口ことば」、時まさに庄内に矢口裕康、瀬尾治氏などによつて早物語が発掘されたが、最上地方にもこんなにたくさん早物語があつたことが証明された。次いで「子供の唱え唄」を六〇号（57・4）「狐むかし」を六三号（57・12）六六号（58・5）、さらに「婆々さの炉辺むかし」と「道草遊びと悪口唄」を七〇号（58・1）「俚諺・戯れ唄」を七一号（59・1）に寄稿して下さったのは、ありがたいことであつた。

「婆々さの炉辺むかし」（年中行事の巻）が送られてきたのは、三月に入つてからである。四十枚の大作である。しかも「長い昔話」はまだ記憶に残り、しまい込まれているということである。

昔話について言えば、國學院大学の野村純一氏の編んだ『笛吹き聲』にも、早物語が三篇収録されている。しかもその本のカバーには佐藤家が写っていると、野村氏より知らされた。

佐藤さんの寄稿くださった資料はすでに二百五十枚にも達し、『山形の民話』を飾っていただいたが、ガリ版、タイプ刷りの小冊誌ゆえ、失われることも多いだろうし、利用するにも不便であろうと考え、稚拙なガリ版で申し訳ないと思いながら、一冊にしておこうと思ったのである。単なる昔話資料としてだけでなく、数少ないわらべ唄資料としても、さらには民俗資料として、第一級のものであることを思えば、後日のために、もっとよい保存手段を講ずるまで、ガリ版でもと考えたものである。そして現段階で、佐藤さんの資料を必要とする方々の手元で利用していただければと念じて、ガリ版にしたものである。

ガリ版にするにあたって、特殊な民俗用語や言い廻しに、佐藤さんが自らつけられた解説なり、読みをそのまま生かし、また反面、読みやすいように、漢字をカナに直したり、紙数節約のために、行がえをしないで書いた部分もあり、佐藤さんの意図に合致しない点も残ったことはご寛容おねがいしなければならぬ。ただ、これをもとにしてさらに民俗の研究調査がすすむことをねがっている。

山形県最上地方の民俗研究は、大友義助氏などによって現在もすすめられてい

るが、故佐藤義則氏の仕事、昔話についてはさらに野村純一・敬子夫妻による昔話集や研究があり、最近では方言や昔話の高橋良雄氏の仕事もあるが、このような中に、佐藤さんのユニークな新資料は光彩を放っていると自負したい。それは佐藤さんがこの土地に生れ、育ち、その上にすぐれた目でゆるぎなく地域をとらえ、庶民の生活を整理してくれているからである。しかも単なる資料集としてでない楽しさがあるという点でも、柳田國男先生の言われる地域に住む人による地域の民俗の一典型たりうるものと信じている。語り残してあるものを、さらにまとめて下さることを念願している。

昭和五九年 四月

安楽城の伝承

― 佐藤陸三さんの語り ―

昭和五十九年四月三十日 発行

著 者 佐 藤 陸 三

編集・印刷・製本

武 田 正

山形民話の会

南陽市三間通二三―三
武 田 正 方

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十八年三月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇三三―六八八―七五四四